

木原遺跡

第2次発掘調査報告書

1994

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

木原遺跡
第2次発掘調査報告書

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、木原遺跡の調査成果をまとめたものです。

木原遺跡は山形県北西部の飽海郡遊佐町にあり、秀峰「鳥海山」を仰ぎ見る肥沃で広大な庄内平野の北端近くに位置しています。

遊佐町は稲作を主産業とする農業の町であります。大規模で近代的なほ場の「区画整理事業」等が継続して行われており、これらに係わって多くの遺跡がこれまでにも調査されてきましたところです。

調査では、平安時代の中頃から後半にかけての良好な集落跡が検出され、12棟の掘立柱建物跡をはじめとして幾つかの井戸、あるいは烟の跡などが見つかりました。厳しい自然環境の中で、米作りを行い嘗々と生活を築いてきたことの何よりの証しと言えます。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産です。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後生に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区域内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、迅速に行われるこれが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　言

- 1 本書は県営ほ場整備事業（月光川下流地区）に係る「木原遺跡」の第2次発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺跡名	木原遺跡 (AYZKH)	遺跡番号	平成2年度登録 (山形県1990)
所在地	山形県鮎川郡遊佐町大字宮田字木原・高田		
調査期間	発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日		
	現地調査 平成5年5月11日～平成5年7月30日 59日間		
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
- 4 発掘調査担当

調査研究課長	佐々木洋治
主任調査研究員	佐藤 庄一
調査研究員	阿部 明彦
調査研究員	斎藤 俊一
- 5 資料整理担当

調査研究課長	佐々木洋治
調査研究員	阿部 明彦
嘱託職員	黒坂 広美
- 6 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区、遊佐町教育委員会など関係諸機関の協力を得た。ここに記して感謝申しあげる。
- 7 現地調査における平面図 (1/40・1/100) の作成は航空測量によって行ったものであり、その業務を株式会社シン技術コンサルに委託している。また、出土品他の資料理科学的分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して報告を受けたものである。
- 8 出土遺物調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。
- 9 本書の作成・執筆は阿部明彦が担当した。編集は安部 実・伊藤邦弘が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。

凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S B : 建物跡 S K : 土廣 S E : 井戸 S D : 溝 S P : 柱穴・ピット S J : 水田
S A : 杖列 S X : 性格不明 S G : 河川 E B : 掘方 R : 遺物 R P : 登録土器
S : 碑 W : 木製品 M : 金属製品 F : 包含層

2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号を踏襲したが、建物跡等は本書で新たに追加したものがある。

3 報告書執筆の基準は次の通りである。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図中の方位は真北を示している。

(2) グリッドの南軸は、N-25°-Eを測る。

(3) 遺構実測図は1/2・1/40・1/80・1/160・1/400で採録し、各々スケールを付した。

(4) 遺構エレベーションや断面図中のスクリーントーンは主として柱根、あるいは一部の柱痕を表している。

(5) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中のスクリーントーンは主として黒色処理、一部塗布部を表している。

遺物図版については1/2・1/3・1/4を基準としたが、一部については任意のものがある。

(6) 遺物観察表中の計測値は現存値である。また、出土地点欄の層位では、Fは遺構覆土内、ローマ数字は基本層序の土層番号を表している。

(7) 遺構覆土の色調記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査に至る経過	1	3 土壌	17
II 遺跡の立地と環境		4 灰(烟)跡	20
1 地理的環境	2	5 溝跡・川跡	20
2 歴史的環境	2	V 出土遺物	
III 調査の概要		1 土器	24
1 調査区の層序	3	2 土製品	26
2 遺構と遺物の分布	3	3 石製品	26
IV 検出遺構		4 金属製品	26
1 掘立柱建物跡	7	5 木製品	26
2 井戸跡	17	VI まとめ	37

挿 図

第1図 遺跡位置図	1	第14図 遺構実測図(1)	19
第2図 土層柱状図	3	第15図 遺構実測図(1)	21
第3図 調査概要図	4	第16図 遺構実測図(2)	22
第4図 遺構配置図	5	第17図 建物跡配置図	23
第5図 遺構実測図(1)	9	第18図 遺物実測図(1)	27
第6図 遺構実測図(2)	10	第19図 遺物実測図(2)	28
第7図 遺構実測図(3)	11	第20図 遺物実測図(3)	29
第8図 遺構実測図(4)	12	第21図 遺物実測図(4)	30
第9図 遺構実測図(5)	13	第22図 遺物実測図(5)	31
第10図 遺構実測図(6)	14	第23図 遺物実測図(6)	32
第11図 遺構実測図(7)	15	第24図 遺物実測図(7)	33
第12図 遺構実測図(8)	16	第25図 遺物実測図(8)	34
第13図 遺構実測図(9)	18	第26図 建物跡変遷図	38

表

表-1 遺物観察表(1)	35
表-2 遺物観察表(2)	36

図 版

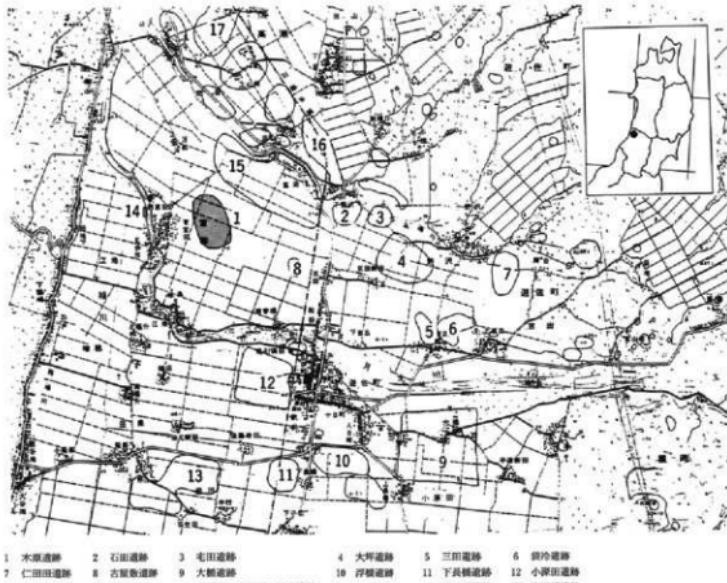
- 図版1 調査区遠景・近景、調査風景
- 図版2 調査区全景（空中写真）
- 図版3 調査区中央（空中写真）
- 図版4 調査区全景
- 図版5 建物跡近景
- 図版6 S E 9 検出状況
- 図版7 S E 8 検出状況・遺物出土状況
- 図版8 S K22・26・32・43検出状況・土層断面・遺物出土状況
- 図版9 S K3・18・19・23、34～36・40検出状況・土層断面
- 図版10 S B12建物跡柱穴検出状況・土層断面
- 図版11 E B50他柱穴検出状況・土層断面
- 図版12 E B55他柱穴検出状況・土層断面
- 図版13 S D199・S G 6・S D38溝跡検出状況
- 図版14 蒔金具（丸範）・あかやき土器・須恵器出土状況
- 図版15 出土遺物(1)
- 図版16 出土遺物(2)
- 図版17 出土遺物(3)
- 図版18 出土遺物(4)
- 図版19 出土遺物(5)
- 図版20 出土遺物(6)
- 図版21 出土遺物(7)
- 図版22 出土遺物(8)
- 図版23 出土遺物(9)
- 図版24 出土遺物(10)

I 調査に至る経過

遊佐町北西部に位置する宮田・富岡地区の東南部一帯には、庄内高瀬川や月光川の流れに沿って断続する数多くの平安時代を中心とする遺跡群が点在している。遺跡の立地基盤は、上記河川が形成した微高地（自然堤防）と理解でき、基本的に現集落の立地状況とも変わらないと看取られた。低平で沖積の発達する平野部にあっては、周囲より水捌けがよく、より高燥な住空間と、飲料水や農業用水などの利便さが求められたことは言うまでもない。

こうした遺跡の分布状況はこの地の環境に生きた人々の軌跡とも写り、いつしか水田と変わりながらも辛うじてその存在を地中に止めてきたと言えるのである。すなわち、生活に必要な条件が一時的にしろ満たされ選地された場所だったと少なくとも言えるだろう。

一方、今日まで辛うじて残されてきた遺跡群は、近年の大規模で継続的なば場整備事業他の開発の波を直接にかつ広範に受けるようになってきており、その保護と今日の課題との調整とが急務になった。今回の調査も、本年度に行われる県営ば場整備事業（月光川下流地区）を主原因としている。調査に先だつ平成4年秋に、遺跡の保存状況や範囲他の確認を目的とした詳細分布調査が県教育委員会によって行われ、その結果を基とした保存協議や、施工方法を含めた事前の調整が重ねられた。しかし、止むを得ず壊れると判断される部分を対象として記録保存を目的とした緊急調査が計画され、その調査を新設なった山形県埋蔵文化財センターが主体となって実施する運びとなったのである。



第1図 遺跡位置図(1:50,000)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

木原遺跡は遊佐町の中心部から北西方向へ約2km、最寄りの宮田集落の東方約200mに位置し、東西300m・南北500m以上の規模で南北方向に伸びる広大な平安期を中心とする集落跡である。標高は南端側の第1次調査区付近で7.00m、北端近くの第2次調査区付近で5.60mを各測り、総体として東南方で高く、北西方に低くなる様子が窺えた。

遺跡の立地する一帯は水田で、北から東南方向にかけて鳥海山の雄姿と緩やかに連なる稜線、山裾の村邑を見渡すことができ、西側は真近に迫る庄内砂丘が日本海からの季節風を和らげている。空間的には、南東に開け西や北に閉塞する位置環境と認識でき、月光川の対岸に東田・下長橋・地正面遺跡他の遺跡群、その向こう側に国衙を中心とする遺跡群が広がっている。こうした遊佐町北半の平野部は、月光川、高瀬川、洗沢川等の北西に流下して日本海に注ぐ中小の河川が形成した沖積平野である。現在は長年の水田耕作他の影響から平坦化されているものの、かつては月光川や高瀬川の流路に沿って形づくられた自然堤防などの微高地、あるいは後背湿地がより明確な形で点在していたものと推測される。遺跡周辺に見る泥炭層の分布や河川による砂礫層他の堆積物、そして遺跡の分布状況等が雄弁に語ってくれる所である。稻作を営み低地での居住域を拡大させていった人々にとって、河川や自然地形が如何に密接な係わりを持っていたかと捉えることができる。

2 歴史的環境

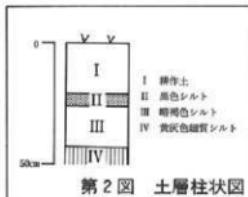
遊佐町管内で現在確認される遺跡は173箇所以上におよび、県内でも有数の遺跡密集地域と記憶される。時期的には後期旧石器時代から江戸時代にわたり、中でも縄文時代前中期葉の吹浦遺跡（県指定史跡）、縄文時代後・晩期の神矢田遺跡、大陸との交渉を物語るとされる三崎山出土の青銅刀、特殊な出土状況や端正な形姿を止める杉沢遺跡出土の土偶等をはじめとして内外に知られる著名な遺跡・遺物の多いことが特筆される。

ところで、月光川右岸・高瀬川左岸の流域には上流部から仁田田・袋冷・三田・大坪・宅田・石田・古屋敷・道内A・道内B・上高田・木戸下遺跡、そして木原遺跡等の平安時代に時期的中心をおく数多くの遺跡が分布している。同様に高瀬川右岸には道中・宮の下・横待・堂田・北目長田・地蔵田・野瀬・中田浦・筋田等の遺跡が断続的に連なって特徴ある川筋の遺跡列として現れている。各遺跡間の距離を機械的に割り出すと500m前後で断続していることが理解でき、「隣村との距離」とする観点からは興味深い。但し、遺跡の同時性や、性格等集落構造の解明がその前提に必要であるのだが現在のところは不十分である。この中で試掘以外の発掘調査が行われた遺跡は高瀬川左岸域で本遺跡を含めて仁田田遺跡(7)、袋冷遺跡(6)、三田遺跡(5)、大坪遺跡(4)、宅田遺跡(3)、石田遺跡(2)の計7遺跡、右岸側で中田浦(1)、筋田、地蔵田、野瀬の計4遺跡がある。いずれも9世紀から10世紀に主体があると考えられ、石帶や建物跡が注目される石田遺跡、廐舎規模の建物や水場等が検出された宅田遺跡など、下級官人層や駅家等に係わると考えられる遺構・遺物が注目される。

III 調査の概要

1 調査区の層序

調査に先立つ平成4年10月に行われた分布調査の内容を検討すると、地盤安定な地点が今回の調査区を南東～北西方向に連なって認められ、そこでは検出面までの深さが20cm内外と浅くなっていた。遺物類の出土



第2図 土層柱状図

点数も10点単位でまとまりを見せており、一方、調査区の北東部および西南部では泥炭層の分布が認められ、出土遺物も流れ込みによると思われる状況があった。低温で居住には適さない地形であったことは明らかである。なお、調査区中央部分の基本層序を右の第2図に掲げておく。III層の中位から低面にかけて遺物の包含が認められ、遺構の検出面はIV層直上であった。また、一部の遺構覆土中に火山灰の堆積が顕著に見られたことも指摘すべき事項である。第1次調査や、近隣の石田遺跡、袋冷遺跡、あるいは浮橋・下長橋遺跡他でも検出された火山灰に同一と推測できるもので、後に詳しく述べるが、本遺跡の具体的な遺構とすればS K40土壤や煙の畝跡と考えられるD-8グリット周辺の小溝跡群(SD119他)が埋積の過程に当たっていた。遺構全体から見れば數的に限られ、ごく少いようにも思われるが、上半を削り取られてしまった遺構の存在も考慮すべきであろう。本遺跡の営まれた時代に降灰があったとすれば絶対年代や周辺遺跡との関連を探る上で特筆される。

2 遺構と遺物の分布

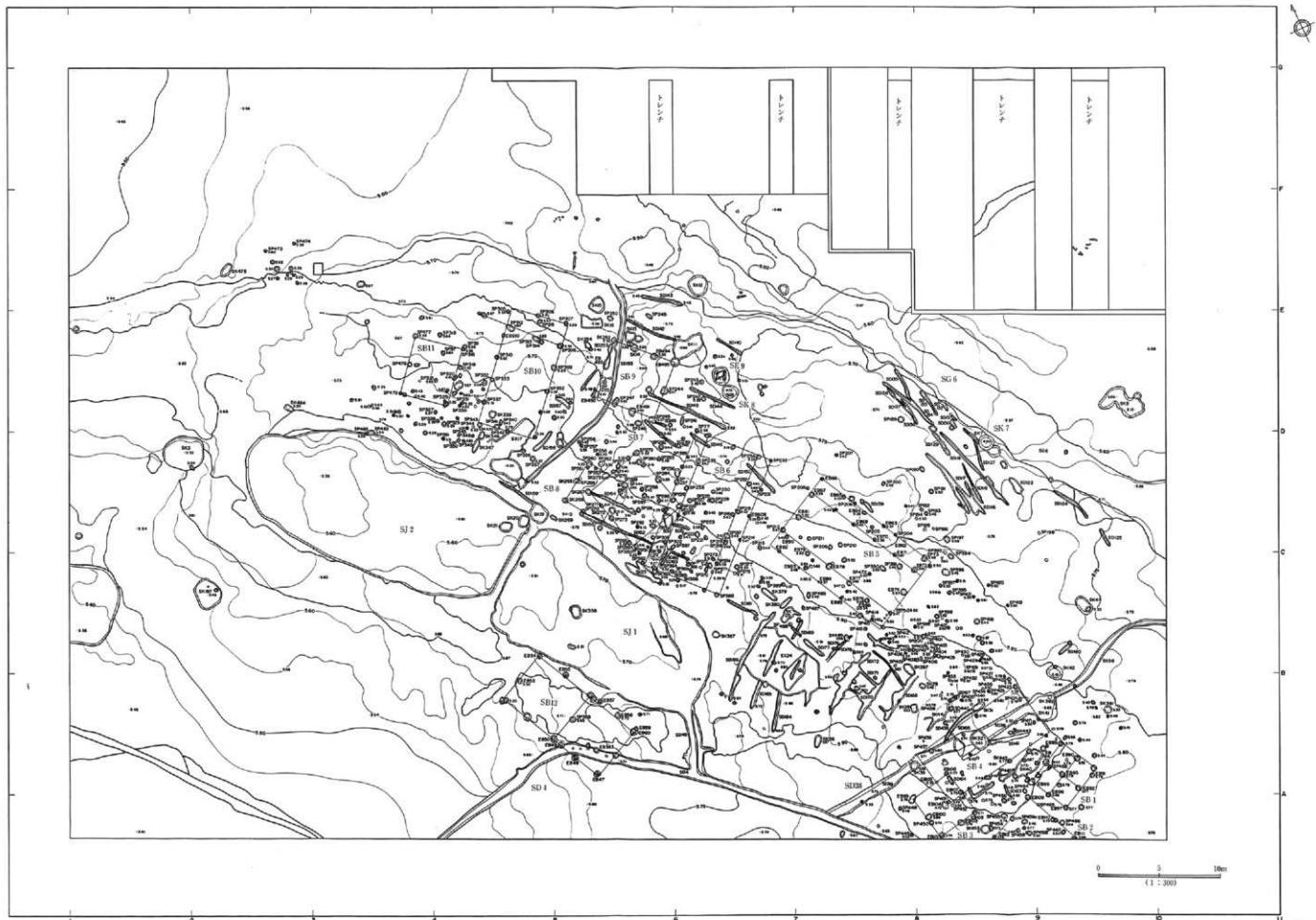
検出遺構の配置状況は第4図に示した通りである。調査区の中央を斜めに縦断する河川跡を中心として形成される自然堤防上に、建物・井戸・土壙・溝他の平安時代に所属する遺構群が南東から北西方向に向けて構築された様子が明らかである。砂地を基本として埋積された旧河川跡は、第一次の調査区でも確認されたものであり、流路方向から推して同一河川の可能性が高いと思われる。しかし、途中の状況が確認されないためその断定はひかえておこう。但し、建物跡は確実に河川の生きていた時期よりは後出のものであり、完全にその機能を停止して埋め尽くされた段階以降に塗かれている。以下に建物跡を中心とする遺構の配置状況を概観しておく。

検出された建物跡はSB 1～12までの12棟である。他に柱列SA 13があり、これらに井戸・土壙・畝状溝跡(細)、あるいは区画や用排水に関わる溝、および池や水田状の遺構SJ 1・2他が加わって本遺跡の遺構内容が構成される。建物跡の位置は旧河道に沿う自然堤防の頂部であり、南から北へ向かってSB 1～4・SA 13、SB 5～9、SB 9～10等のまとまりが指摘できる。単独的なSB 12建物跡も前記建物跡群の幾つかと組合わされて機能したと考えてまちがいはないだろう。これらは、その梁・桁行の規模、あるいは掘り方の大きさや柱材のあり方、埋土、出土遺物等の諸点から性格的相違と時期差を示すと窺えた。後項に述べるが、これらはI～V期にわたる井戸跡・土壙・畝跡等も含めて考えられる時期的変遷(第26図参照)の結果と捉えられる。

III 調査の概要



第3図 調査概要図



IV 検出遺構

1 挖立柱建物跡（第5～11図）

S B 1 建物跡（第6図）調査区南東端部B—9グリットを中心をおく東西二間・南北二間の総柱建物で、倉庫跡と考えられる東西棟である。柱間は南北方向で6尺、東西方向で7尺等間と捉えられる。掘り方は径40～50cm、深さ20～30cmを各測り、相対的に見て本遺跡の中では規模的に大きい部類と判別される。遺物はE B 89・90・92・94・95等から出土し、あかやき土器壊・甕類を中心に32点程があり、若干の須恵器系切壊や無台の黒色土器内黒椀等破片が散見できる。建物の主軸方向はN—62°—Eである。

S B 2 建物跡（第6図）調査区の南東端部A—8・9グリットを中心をおく東西2間、南北2間以上の南北棟で、南半が調査区外に係るため全形が確認されない。掘り方は径40cm、検出面からの深さ30cm内外を測り、規模的にしっかりとしたものと考えられる。柱間は柱穴109～113間（中心間距離）で218・212cm、同109～111間で275・239cmを各測り、梁行で7尺、桁行8尺等間と窺える。遺物を出土した柱穴はE B 109に限られ、掘り方内からあかやき土器壊の小片2点が検出された。建物の主軸方位はN—24°—Eである。

S B 3 建物跡（第5図）S B 4 建物跡に接し、S B 1・2に隣接する二間・二間規模の倉庫跡と考えられる南北棟である。柱間は東西方向で6尺、南北方向で7尺と判断でき、S B 1の間尺に共通するあり方が窺える。掘り方の径は40～60cm前後を各測り、規模的にもS B 1同様と認められた。遺物はあかやき土器の壊類9点と1点の内黒椀破片が出土している。建物の主軸方位はN—9°30'—Wである。

S B 4 建物跡（第5図）S B 3に接し、S B 1・2の北に隣接する梁行二間・桁行四間の東西棟で北辺に廂をもつ。重複ではS D 38を切りS B 3・S K 41に切られる等の関係が認められた。柱間は梁行で8尺等間、桁行は7尺ないし8尺と不整である。掘り方は絶じて小振りであり径25cm内外のものが大半を占める。遺物はあかやき土器23点を中心として須恵器壊2点、内黒椀3点等の破片が散見される。建物の主軸方位はE—10°30'—Sを測る。

S B 5 建物跡（第7図）C～D—7グリットを中心をおく梁行二間・桁行五間の南北棟で、東西両側に廂をもつ。柱間は梁行約7尺、桁行は7尺等間と窺えるが、全体に配列その他の不揃いが目につく。身舎から廂までの間尺も同様に不整であるが、5尺等間を意図していたと窺える。掘り方は身舎部分で径30～50cm、同廂部分で20cm内外を測り、面積約80平方mの規模としては小さいと思われた。一部に残る柱根も掘り方相応の小円柱である（E B 62・64）。遺物はあかやき土器59点、須恵器5点、内黒椀1点等の破片類が出土している。

S B 6 建物跡（第9図）D—6グリットを中心をおく梁行二間・桁行五間で、東西に廂のつく二面廂建物である。構造的に床敷きを想起させる身舎中央の柱列（柱列366～229）が確認され、北側は土間だったのか検出されない。柱間は梁行8尺、桁行8尺等間と推測できるが、S B 5 同様のばらつきがあって不揃いである。掘り方からの出土遺物は須恵器甕1点、あかやき土器14点他の破片類が認められた。建物の主軸方位はN—44°30'—Eであ

る。

S B 7 建物跡（第10図）D—5 グリットに中心をおく。柱穴279・225・293・267他から構成され、S B 6・8等と重複する。柱穴同士の切り合いがないため先後関係は不明であるが、主軸方位・掘り方等から S B 7 → 8 → 6 の順が考定される。柱間は東西方向で、9尺・8尺、南北方向で9尺等間と窓われ、南北方向で1尺分長い二間・二間の南北棟と認められた。掘り方は径40~60cm、深さ40cm内外を測り、柱間を含めて全体に規模の大きい建物と捉えられる。遺物の出土はなく、柱根や柱痕の形跡も認めていない。抜き取りと埋め戻しが行われた結果と考えられる。建物の主軸方位はN-14°-Eである。

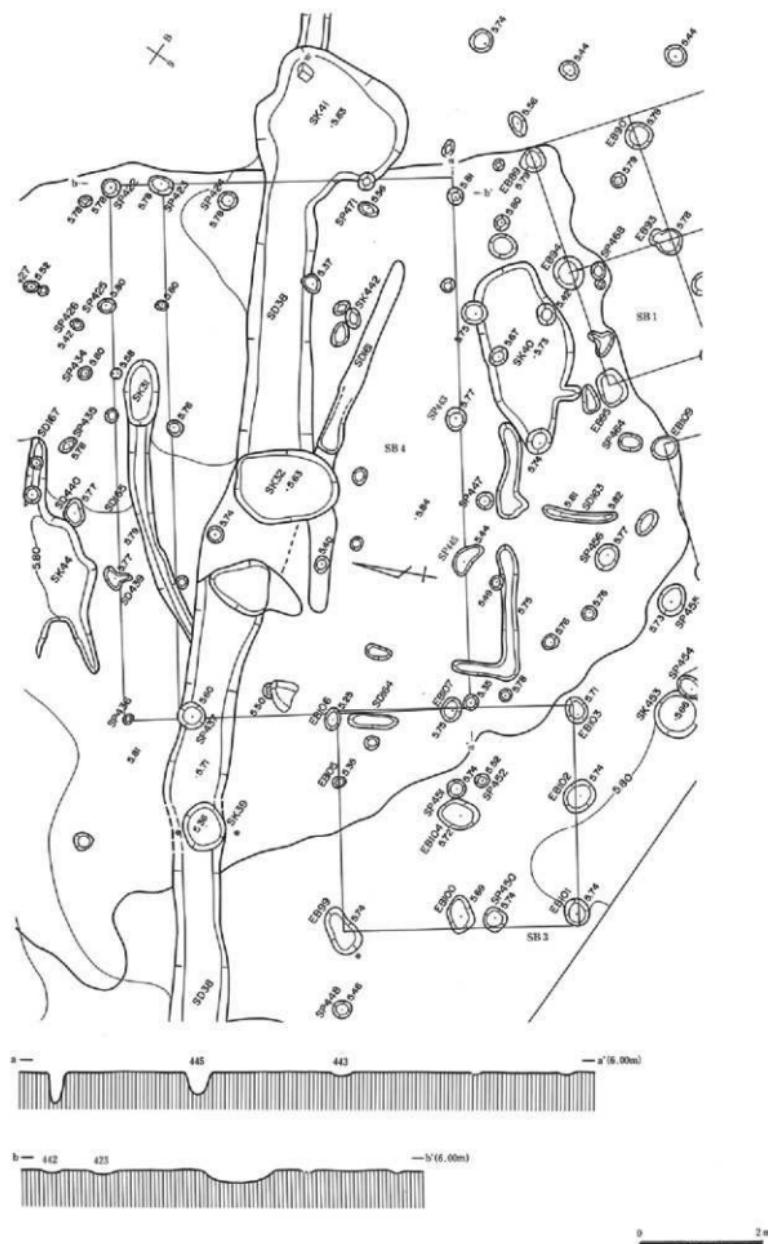
S B 8 建物跡（第10図）D—5 Gに位置し、柱穴260・275・272・601・270・268・266・260等で構成される二間・二間の倉庫風建物である。柱間は6尺等間と窓え、柱穴265・268・270・601・272・275等では柱根が検出された。柱根は綴て割材である。掘り方は径50cm、深さ30cm内外を各測り、規模的にやや大きいと理解される。遺物はあかやき土器の破片類4点に限られており、遺物からの時期相判別は困難である。なお、建物方位は主軸を南北方向と見ればN-32°-Eとなる。

S B 9 建物跡（第10図）E—5 グリットに位置する梁行二間・桁行三間の東西棟である。柱間は梁行8尺、桁行6尺等間と窓えるが、間尺が桁行で短く、梁行で長くなる特徴が顕著である。掘り方は径60~70cm、深さ35cm内外を各測り、掘り方規模とすれば本遺跡の中ではS B 12 建物跡同様に最大クラスのものとなる。遺物は柱穴252からあかやき土器の破片4点、須恵器1点等の計5点の出土があった。建物の主軸方位はN-46°-Wである。

S B 10 建物跡（第11図）E—4 グリットに中心を置く梁行二間・桁行五間の南北棟で、他との重複は認められない。柱間は梁行で8尺、桁行で6尺等間と窓える。掘り方は円形で径30~50cm、深さ20~30cm内外を各測るが全体に不揃いである。遺物は柱穴306~309、343・352等から内黒挽破片2点、須恵器片1点、あかやき土器片20点等が出土している。建物の主軸方位はN-42°30'-Eである。

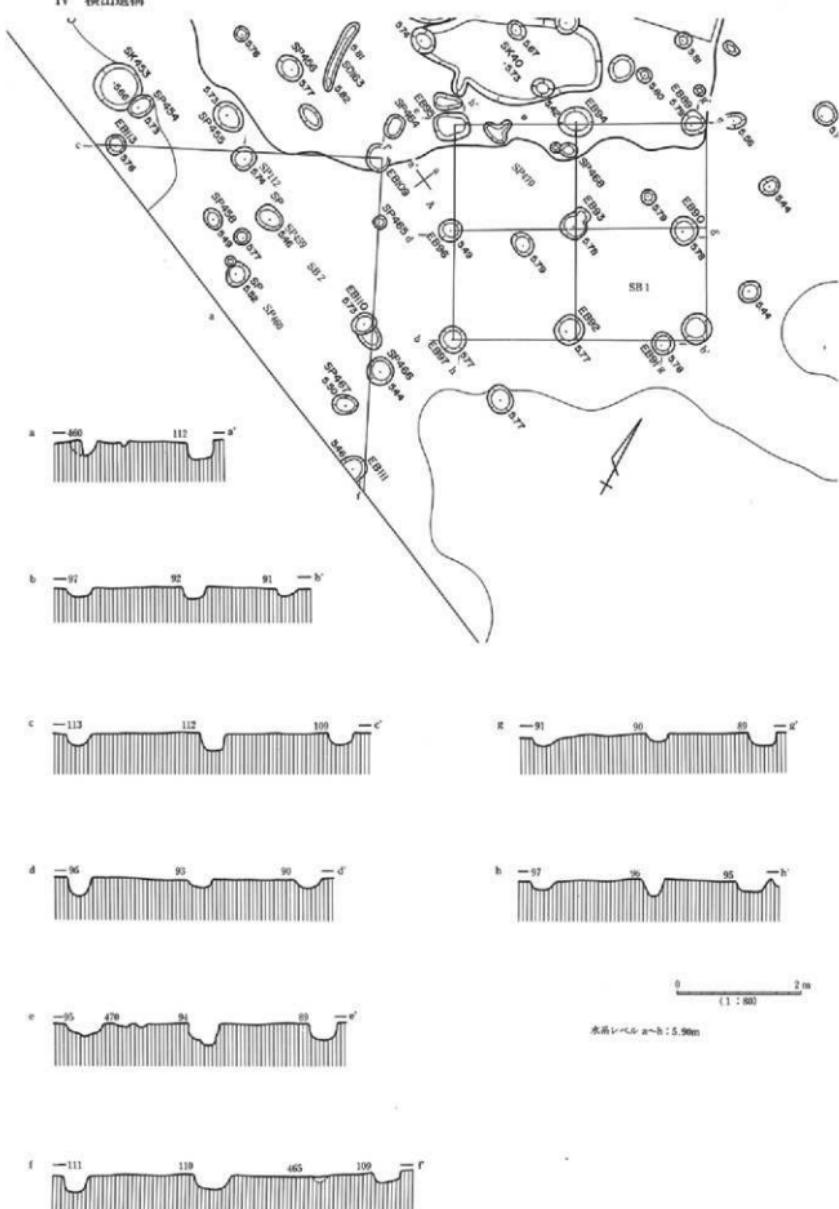
S B 11 建物跡（第17図）調査区内では一番西端に検出された規模の小さい建物跡で、梁行一間・桁行二間の南北棟と考えられる。柱間は梁行で10尺?・桁行で7尺と捉えられるが、全体に不整・不揃いが目だっている。円形の掘り方は径は20~30cm内外と小規模であった。建物の主軸方位はN-39°30'-Eを測り、ほぼS B 10に平行すると見なされる。

S B 12 建物跡（第8図）B—5 グリットに中心をおく東西二間・南北四間の南北棟である。柱間は東西方向の梁行で8尺等間、南北方向の桁行で7尺・7尺・9尺・9尺となり一様でない特徴が認められる。掘り方は円形ないし小判形を呈し、径50cm、深さ30cm内外を測り、柱根を残すものが大半であった。また、E B 52・56・60等では建て替えによると考えられる重複が認められた。一方、柱穴359や桁柱のE B 49、同E B 57の存在から時期的に二時期からなり、南半部の二間は後に増築されたと推測される。E B 50とE B 56を境として桁行の間尺が変わる状況もこうしたこととに起因すると考えられた。遺物は須恵器2点、あかやき土器8点等の破片類、および青銅製の帶金具（丸柄）1点がE B 56の掘り方覆土内から出土しており注目される。なお、建物の主軸方位はN-26°30'-Wであった。

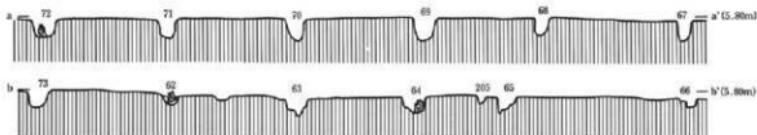
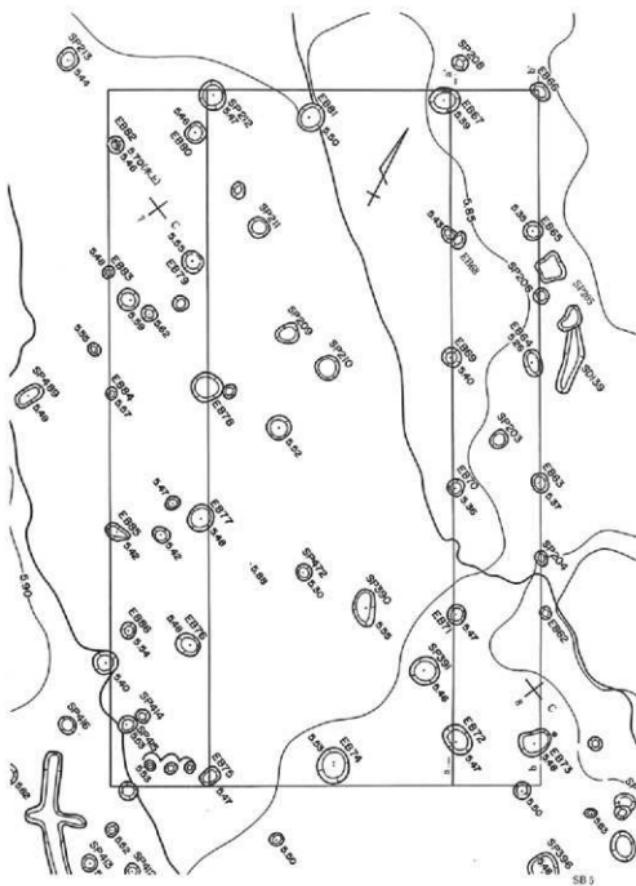


第5図 遺構実測図(1)

IV 檢出邏輯

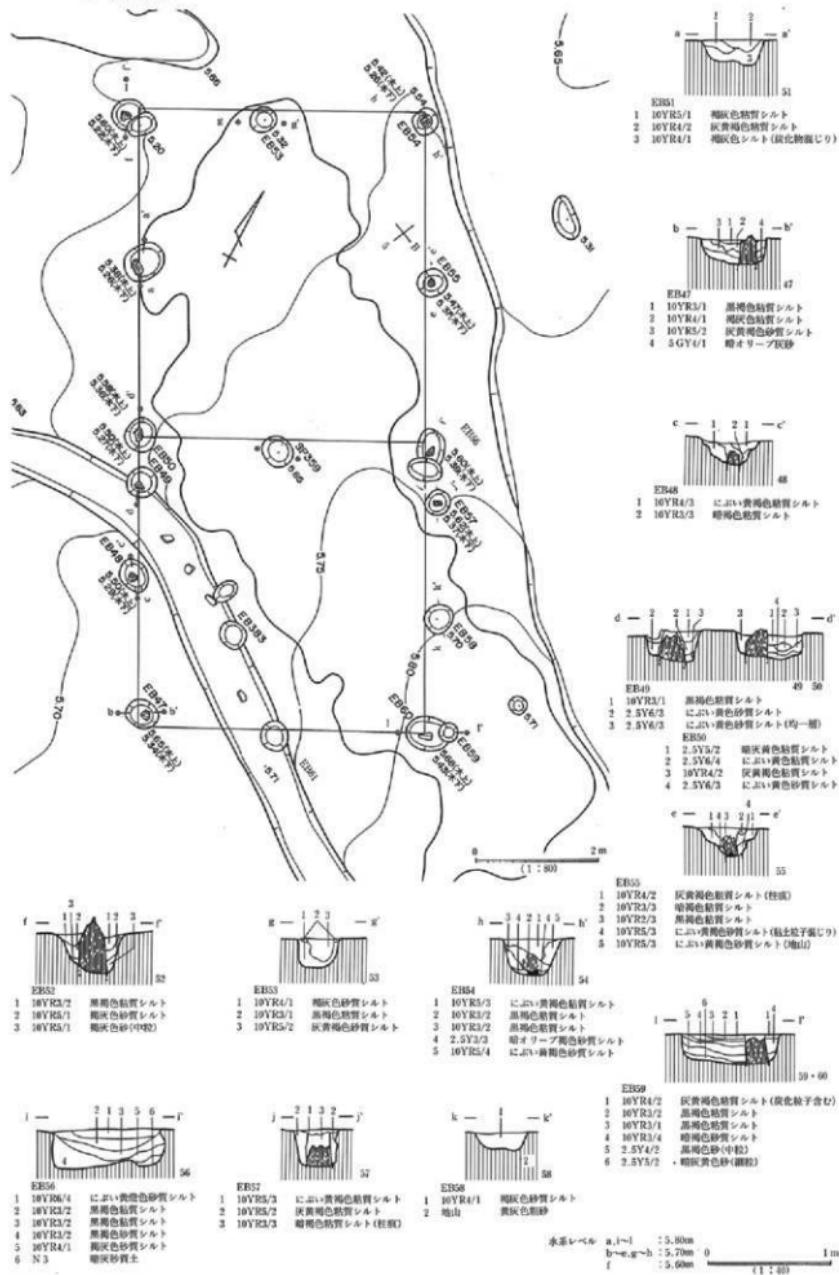


第6図 遺構実測図(2)



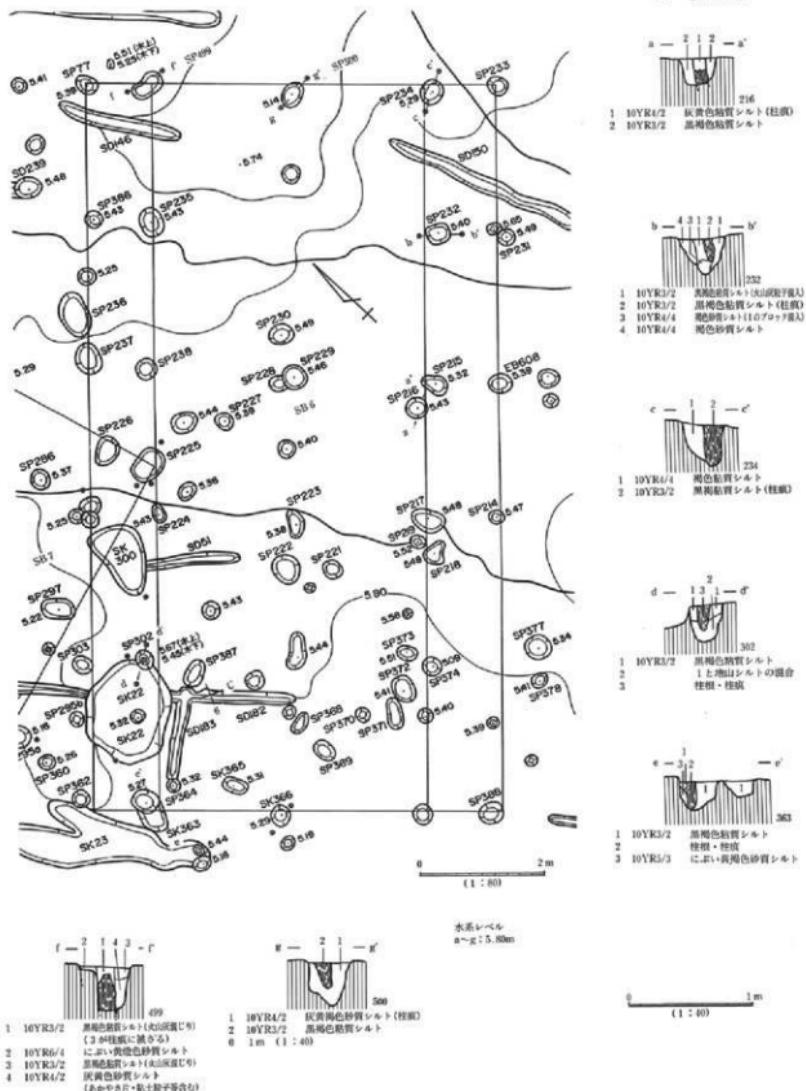
第7図 遺構実測図(3)

IV 検出断構



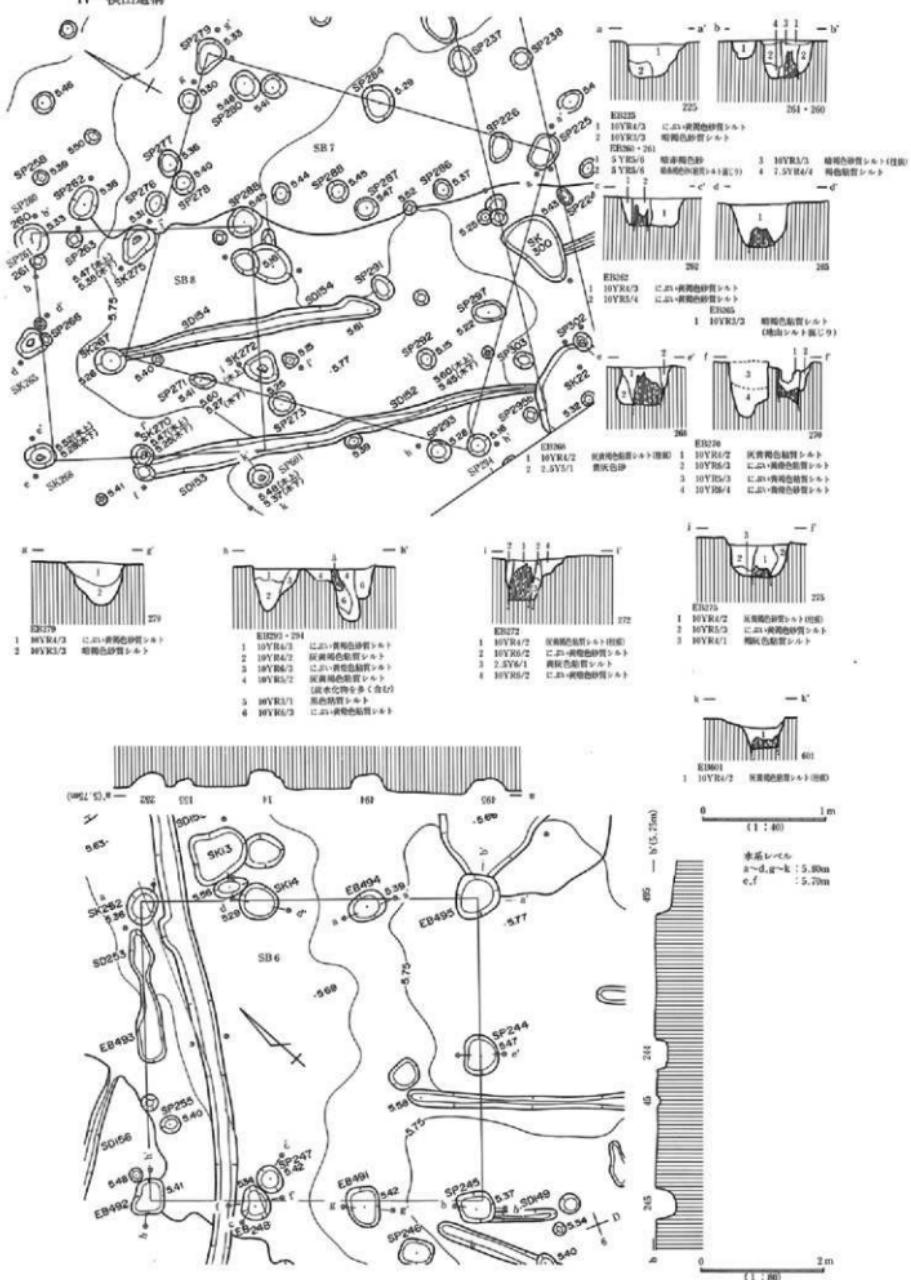
第8図 遺構実測図(4)

IV 檢出遺構

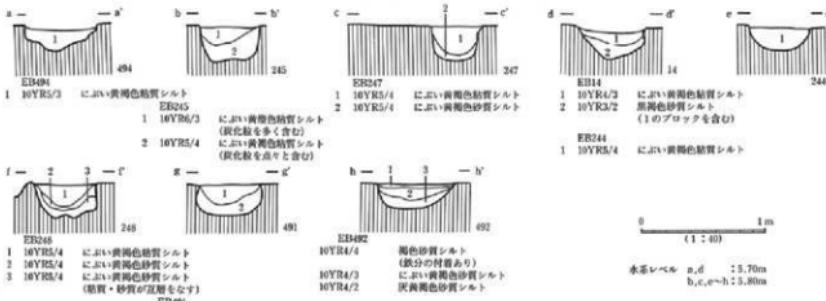


第9図 遺構実測図

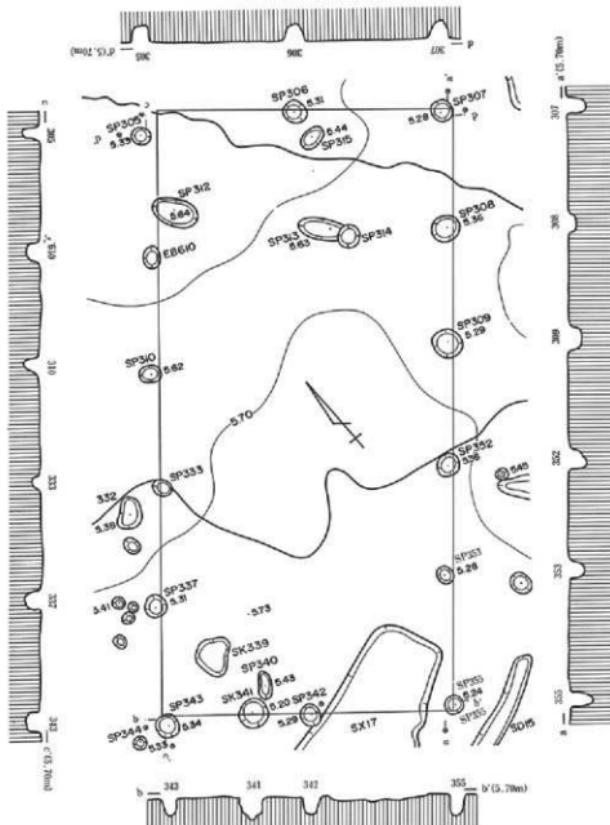
IV 檢出邏輯



IV 檢出遺構



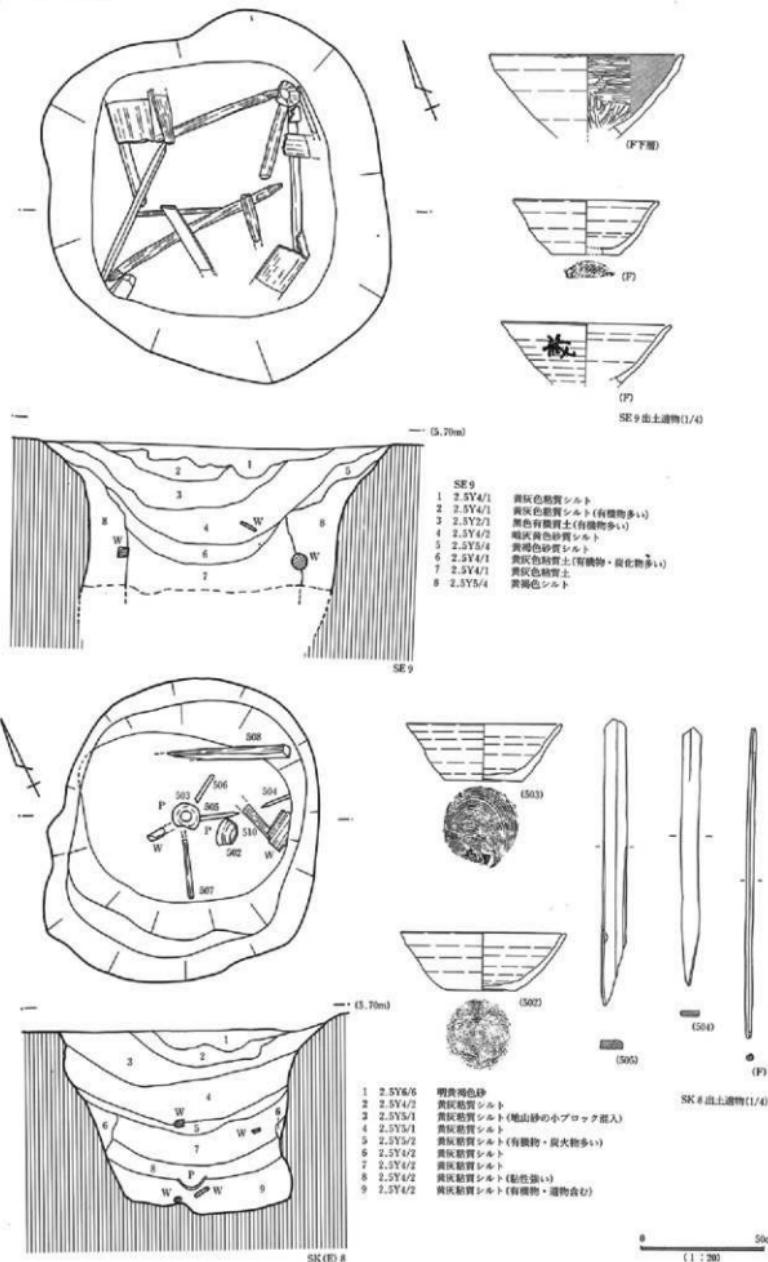
0 1 m
 $(1 : 40)$



2

第11図 遺構実測図(7)

IV 検出遺構



第12図 遺構実測図(8)

2 井戸跡（第12図）

井戸枠等から明確に井戸跡と判断できたのはSE9の1基であったが、隣接するSK8、あるいはSK7やSK42として検出された土壙等も、その規模から見て井戸跡と判断できるものであった。従って、都合4基の井戸跡が本調査区内に存在したと判断できるが、ここでは前二者について述べ、後者については土壙の項で説明しよう。

SE9井戸跡E-6グリットのほぼ中央部、SB6の北東、SB9の南東に位置している。掘り方は隅丸方形プランで南北150cm・東西140cm、深さ60cm以上の規模があり、井戸枠は70cm方形と推測される。井戸枠の構造は、四隅に柱を立てて納穴に横棟を渡すタイプで、外側に5~15cm幅の矢板を配して囲いとするものである。土圧その他から崩れの度合いが著しいが隅柱と横棟各4本、矢板8枚程が遺存していた。堆積層は掘り方の埋め土を含めて7層が識別でき、上部5層は有機質分の多い自然堆積土と判断される。遺物はあかやき土器壺を主体とした破片類若干に限られたが、覆土中位から下半にかけて内黒焼や「藏」の墨書きを認めるあかやき壺の大形破片等が検出された。

SE8井戸跡SE9の南に隣接して位置し、当初明確な井戸枠等が検出されなかつたことから土壙として登録して検出されたものであった。しかし、井戸枠部材と考えられる断片が認められたこと、さらに建て替え等に伴う祭祀の行われた形跡を明瞭に止めていると判断できたことから、後に井戸跡であると認識されたものである。掘り方は隅丸の略方形で、長軸125cm・短軸105cm、深さ75cmの規模を各測る。また覆土は9層からなり、5・9層で有機物や炭化物の多い状況が認められた。遺物は9層を中心として、あかやき土器の壺2点、斎串や箸等の木製品10点以上（第25図）が出土している。

3 土壙（第13・14図）

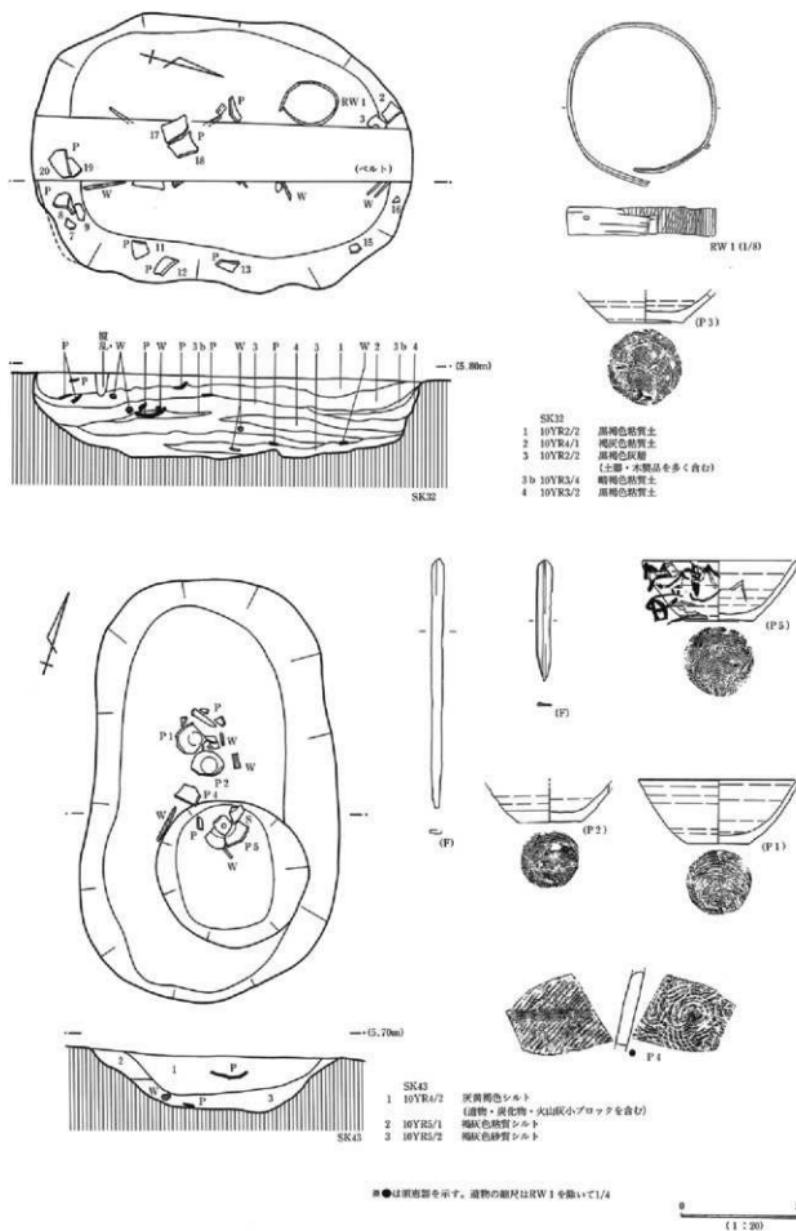
建物跡の周囲を取り囲んで分布する20基程の土壙が検出された。形状その他一様でなく、遺物を多く含むものやそうでないものの違いや別が認められる。以下ではまとまった遺物を出土した土壙や特徴あるものの幾つかについて挿図に従って概述していく。

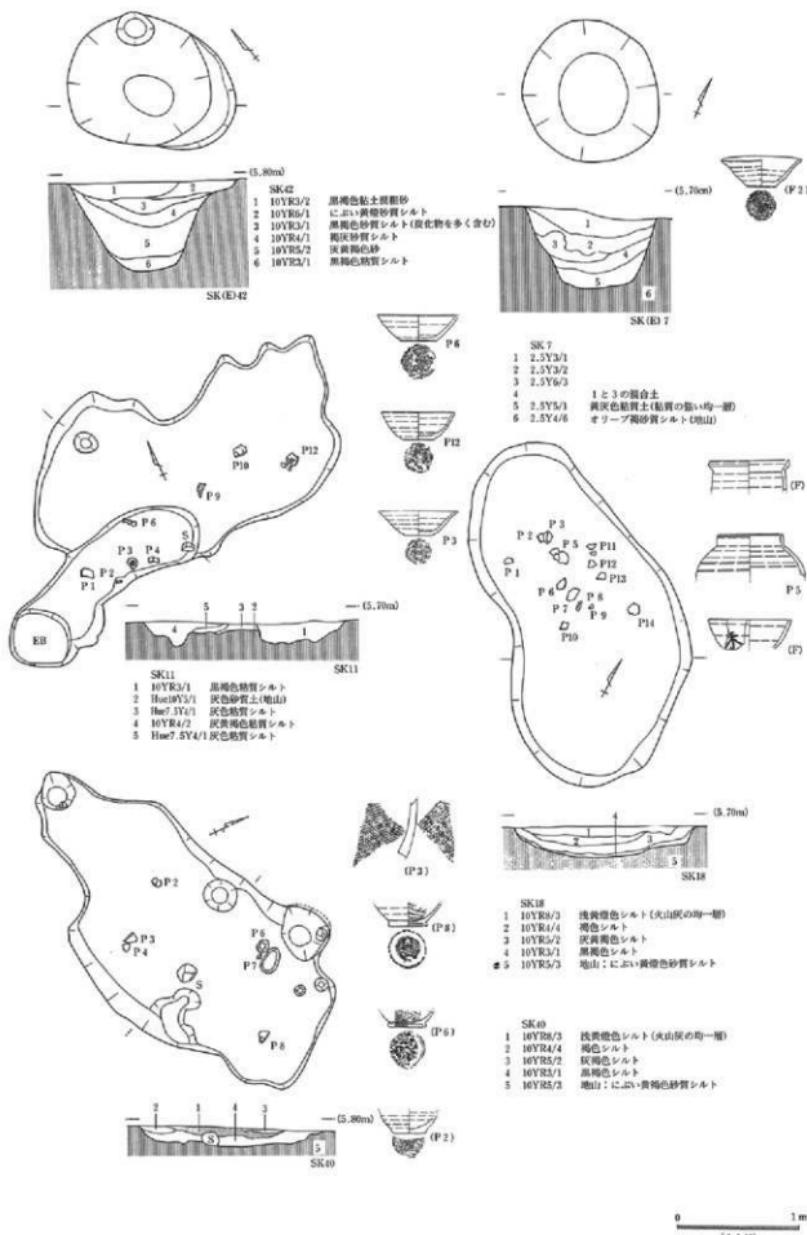
SK32土壙、B-8グリットに位置しSD38を切る重複関係を持っている。平面形は小判形で、長径156cm・短径115cm、深さ34cmの規模がある。覆土は土器や炭化物を多く含む5枚の層序からなり、木製品（曲物・箸）を含む200点強の多くの遺物が出土している。

SK43土壙、C-9グリットのほぼ中央部に単独で位置している。平面形は小判形で、長径170cm・短径100cm、深さ22~50cmの規模があり、南寄りに丸い落ち込みが認められた。覆土は三枚の層序からなり、F1層は火山灰の小ブロックを含んでいる。遺物には完形に近いあかやき土器壺や人面とも見て取れる墨描をもつものがあり、斎串等の出土品を含めて祭祀具の一括的廃棄状況と窺えた。なお、土壙の構築は降灰以後のことと考えられる。

SK7土壙、D-8グリットに位置し、南北に走る竪跡群と重複している。略円形の平面プランで、長径118cm・短径112cm、深さ75cmの規模を有す。覆土は6層よりなり2層下面にあかやき土器壺や木片等遺物を含んでいる。規模他から見て井戸跡と後に考えられた。

SK42土壙、B-9グリットに位置し、重複はない。平面形は楕円形で、長径142cm・短径118cm、深さ74cmの規模を測る。規模的にSK7に近く、井戸枠等施設を認めながら





第14図 遺構実測図(10)

後に井戸跡と推定されたものである。遺物はあかやき土器を主体として26点程があり、黒色土器（2点）や土師器（1点）、須恵器（1点）等各若干も出土している。

S K11土壤、E-6グリットに位置し、S B 9の柱穴495を切る重複関係が認められる。また、平面プランから不整大形で掘り込みの浅い土壤と長楕円状で深い二つの土壤の重なりと認められ、後者が新しいと判断された。覆土は双方で4層を認め、最も新しい埋め土（F 4層）中に火山灰の混入が確認される。遺物はこのF 4層に係わって出土したものが多く（第18図1～3）、全体ではあかやき土器189点、黒色土器9点、須恵器6点を数えた。

S K18土壤、D-4グリットに位置し、S B10・S B 8に隣接している。平面形は不整な椭円形で、長径284cm・短径152cm、深さ26cmを各測る。覆土は四枚の層序からなり、F 1層下面からF 2層にかけてあかやき土器を主体とするまとまりある遺物群が認められた（第20図14・15）。内訳はあかやき土器139点、黒色土器11点、須恵器6点である。

S K40土壤、B-8グリットの南端に位置し、S B 2・4等に近接している。平面形は不整方形で、長径294cm・短径176cm、深さ16cm内外を各測る。覆土は1～5層よりなり、最上部に白色火山灰層の純層が堆積している。遺物はあかやき土器106点、黒色土器5点、須恵器2点等が知られ、若干の須恵器壺・壺類が含まれる状況等注目される。

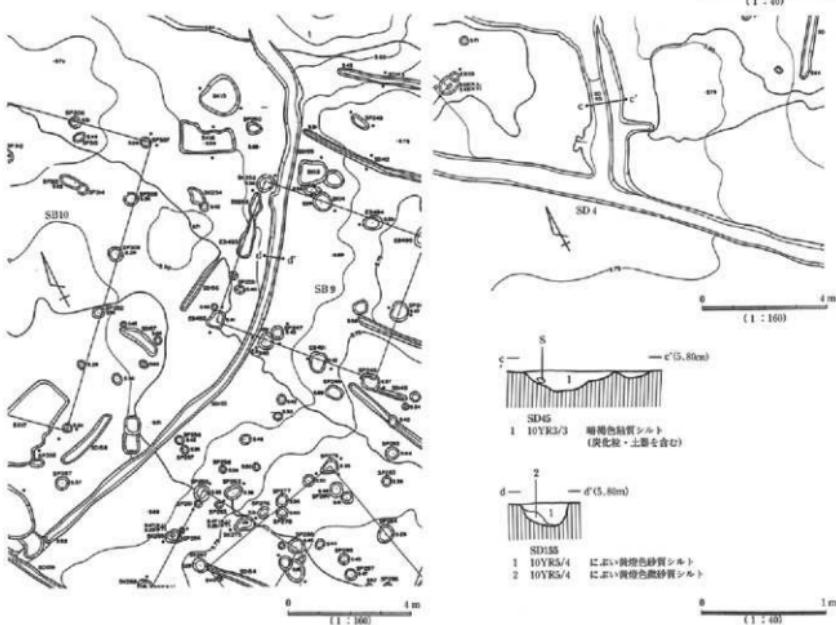
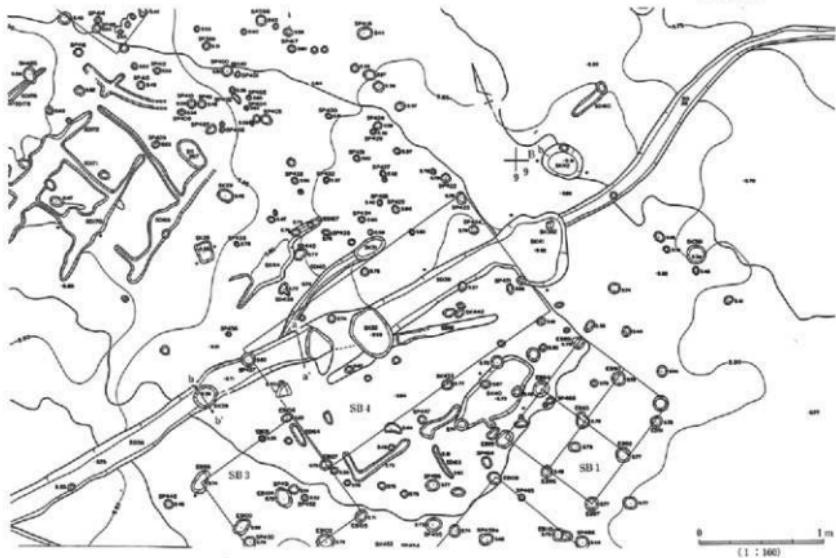
4 火（烟）跡（第4・16図）

幅20～30cm、深さ10cm内外で南北ないし東西方向に走る小溝群がE-7・D-8グリット、B-C-6～7グリット、D-E-5～6グリットの三箇所で検出された。仮にI・II・III群とする。I群は南北方向に14m程走行し、方位的にS B 5と並走する一群とS B 7等に近いものとが識別される。切り合いから前者が新しいと判断できた。なお、前者に帰属するS D 122・133・134・136他の覆土中には火山灰の小塊や粒子等が散見される。II群は東西方向に走る幅の広い一群とこれらに直交する幅のやや狭い一群とがあり、方位的に前者はS B 8やS B 8・9等に近いと看取された。III群は南東から北西方向に走り、S B 6～9の建物群と位置的な重なりが認められる。方位とすれば、S B 6・9に同等となる。これらの単位やまとまりは明確でないが、各群とも配置等関係から二小群以上に細分できる可能性が考えられると同時に建物跡群他との相関が予測される。

5 溝跡・川跡（第15図）

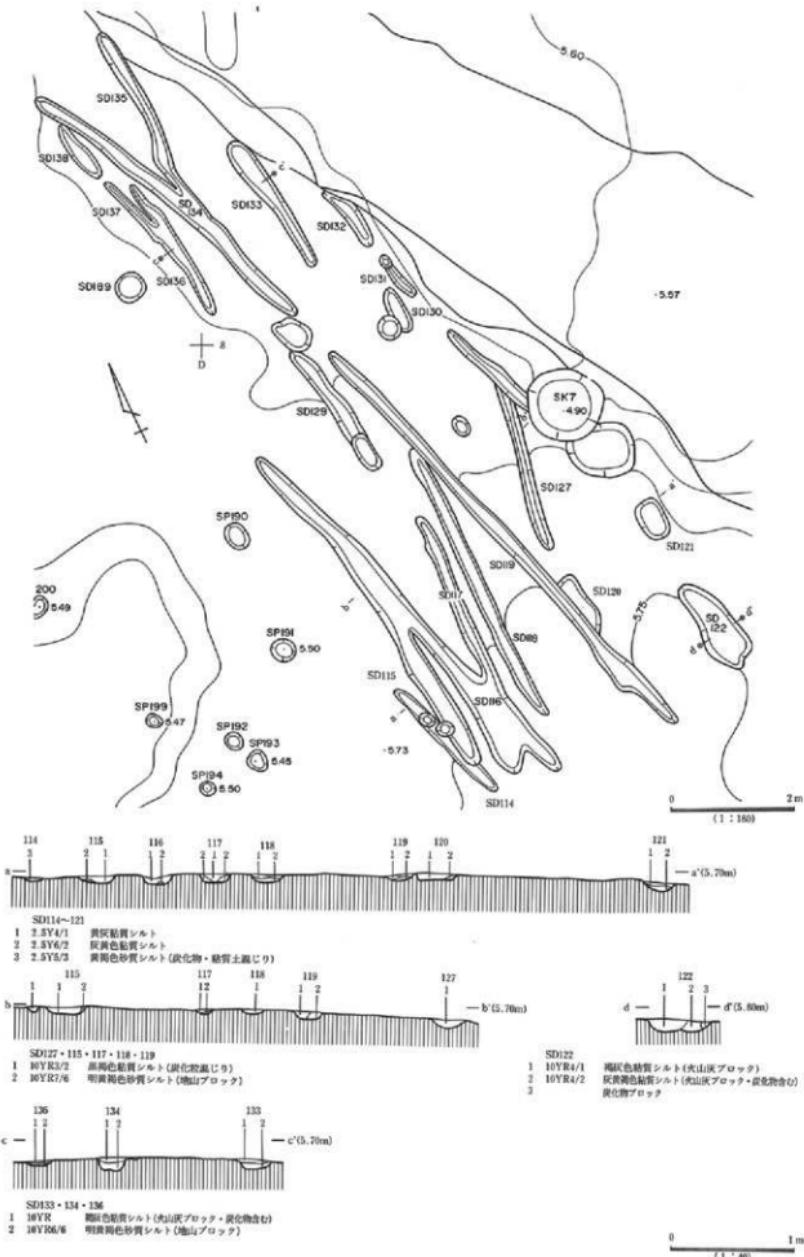
S G 6川跡は建物跡他が占地する自然堤防頂部の平坦面に沿って南東～北西方向に流下したもので、川幅約250cm・深さ40cm前後の規模を有す。上部は人為的な埋立が施され前回の耕地整理以前までは機能していた幹線水路跡と判断される。東側一帯は水田となり、旧畦畔等が北東に広がっている。S D 4も同様の水路跡であり、近世陶磁器類がまとまって検出された。古代に関わる溝跡はS D155・45・38等がある。S D 4の一部もS D38とS D 45とのつながりから見て関わりがあったかと推測される。S D38はS K32・41、S B 4他に切られており、時期的には古い段階のものである。また、S D155はS B10・11と他を意識的に区画するように見え、水利より区画的性格の強い溝跡と考えるのが妥当であろう。

IV 検出遺構

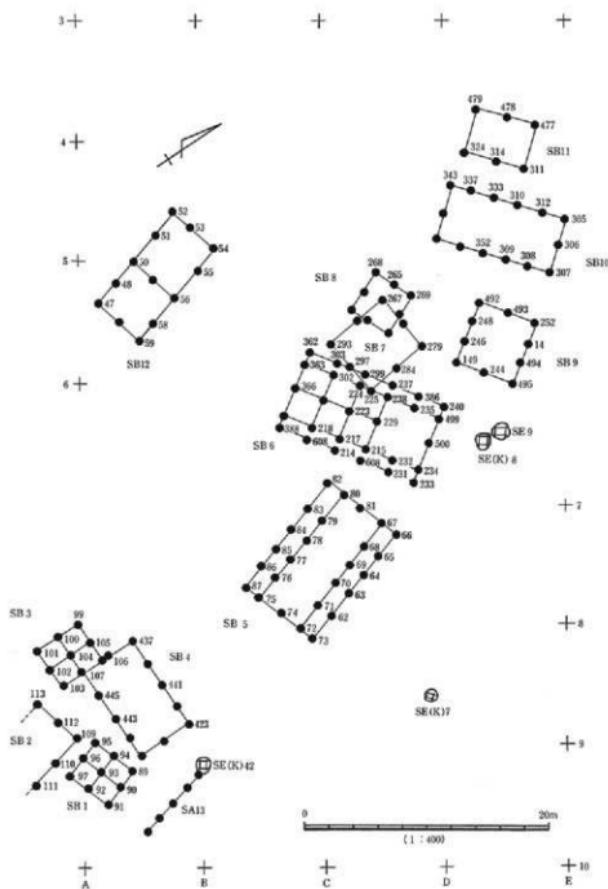


第15図 遺構実測図(II)

IV 檢出遺構



第16図 遺構実測図(12)



第17図 建物跡配置図

V 出土遺物

1 土器

出土遺物は土器の破片類をはじめとする集計から、須恵器2,580点・あかやき土器25,591点・黒色土器1,858点・非ロクロの土師器468点・中近世の陶磁器338点・木製品54点・石製品7点・その他419点の計31,315点におよぶことが判明している。古代の土器に限って割合を求めれば、あかやき土器84%、須恵器8.5%、黒色土器6.0%、土師器1.5%となり、「あかやき土器の卓越、須恵器・黒色土器の低率組成、在地的様相を呈す土師器の存在」等に特徴が認められた。以下に、遺構単位でのまとまりと火山灰との関連を中心に概説していく。なお、個々については章末に観察表を附したので参照されたい。

S E 8・9 戸跡の組成、両遺構の新旧は明確でないが、覆土その他のS E 8→S E 9の変遷が考定される。幾つかの相違点を上げれば、「S E 9のあかやき土器坏ではやや口縁の開きが大きくその分、器高が低くなる特徴が看取される（第19図6・9）。一方、S E 8では口縁の立ち上がりが急傾で、相対に底径も大きい。また、両者共にロクロ目や歪み等が目だたず、およそ端正な造作となる」等に要約できる。なお、S P 200（第19図8）やS D 38（第19図12）、あるいはS K 41（第21図3）等は器形他から見てS E 8・9例により幾分遅り、逆にS K 7（第19図7）・S K 11（第18図1～3）等が後出のものと推察された。黒色土器もあかやき土器同様の傾向が窺われ、S E 9（第20図13・第19図7）よりS K 35例（第21図1）が古く、S K 40（第20図1・3）の有台両黒挽や同内黒挽等が新しい様相と捉えられる。このことは後に述べる火山灰の堆積状況からも傍証される。煮炊形態は器種的にS E 8・9で欠落するため明らかでないが、S E 8とS K 18等での土器相が同等と判断できればS K 18に認める口唇逆「く」の字形等の有角的形態（第20図14）が一般に組成される段階と理解できる。また、須恵器は供膳器がごく少なく、貯蔵形態の壺（第18図4）・甕頬が主体であろう。

S K 40土壤の組成、須恵器1点・あかやき土器106点・黒色土器5点等の出土土器があり、図化できたもの4点がある。あかやき土器坏（第20図2）は口縁外傾で直線的に開く見込みのやや深い形態を呈している。S K 43（第20図5）やS E 8例（第19図8）に類似し、時期的に近接することが推測される。第20図4は小形のあかやき土器鉢下半部である。黒色土器は2点あり、内面を斜方向に磨く第20図3は最終の黒色化処理を行っていない。第20図1は両黒の有台挽で、体部の立ち上がり形態から小形深身の形態と推測される。なお、土壤の堆積土F 1層は火山灰の純層で、遺物の出土はその直下と判断できたものである。従って、ここで土器群は降灰直前の様相と捉えてよい一群と認識される。

S K 43土壤の組成、須恵器1点・あかやき土器17点の破片が出土しており、その内図化できた資料4点（第20図5～8）がある。あかやき土器坏の特徴は「厚手な造作・内湾気味に大きく開く器形・歪がなくロクロ目等の目だたない成・整形」等と指摘でき、S E 9等に近い様相と推察される。なお、土壤堆積土の上部には火山灰の小ブロックが混在しており、火山灰降下後（降灰期）に埋積されたと判断できる状況が注意される。

S K11土壤の組成、図化できた資料はあかやき土器3点（第18図1～3）であるが、破片類では須恵器5点、あかやき土器181点、黒色土器9点が数えられた。あかやき土器は器高が低く、口縁が大きく外傾して開く形態と内湾して立ち上がるものがある。これらは全体に粗略な造作と同時に、口縁の外反の要素が認められる点では新しい要素と注目される。なお、土壤プランには重複が認められ、遺物が主体的に出土した範囲は火山灰ブロックの混入する覆土を切り込む新しいプラン内と判断できた。従って、これらの土器は火山灰の降下期ではなく降下後暫く経過してからの所産と位置づけることができそうである。S B 5建物跡を構成するE B 69から出土したあかやき土器2点（第21図7・8）も同前である。

S K32土壤の組成、あかやき土器205点、黒色土器2点が出土しており、図化できたもの7点（第18図5～10・第19図13）がある。器種的に煮炊具のあかやき土器甕が主体のため、小形の供膳器が明らかでない。あかやき土器甕は第18図6の様な形態的に古いと考えられる個体も認められるが、「器厚があり硬い焼成・丸みの強い口縁部形態・強く明瞭に残される外面のタタキ調整・内面アテ痕のナデや擦り消し」等に特徴が求められ、明らかにSK18等にみる様相とは異なると理解される。なお、遺構の切り合ひからSD38よりは新しいことが明確で、さらに火山灰の影響も認めないこと（降灰後）等からすれば本遺跡の遺構中では最も新しい一群に属するものであると判断される。

S K 3 土壤の組成、遺構の中心的分布域から北西にやや離れて位置するSK 3では、あかやき土器339点・黒色土器28点・須恵器16点・土師器3点が出土しており、量的に少ないながらハケメ調整の甕（第20図11）や、底部に薺状の圧痕を持つ甕（第20図12）が注目される。類例はD-1・F-6グリットその他でも散見され、器種的に甕（第21図11・20・21、第22図9）の他、量的に少ないながら甕（第21図12）等も存在することが判明している。

コンロ（支脚）形土器、遺構検査までの前段で5・6個体分と考えられる44点の二次焼成を強く受けたコップ形を呈する一群（第21図16・18）が出土している。輪積み成形で内面調整は殆ど認められず、外面の調整も指オサエやナデ程度に留まっている。

墨書き土器、全体で15点程の墨書き土器が認められ、字種として「糸」の文字がまとまっている。これらの分布はSK364・SK18の遺構内とB・C-5グリットのSJ 1周辺にまとまる傾向が観えた。その他では「藏」がSE 9、「申」がSJ 2、「十」・「〇」その他が包含層中に見つかっている。また、SK43から出土した墨書き（第24図1）は人面や動物とも見え、同時に出土した畜牛類を勘案すれば祭祀に係わる特殊なものと判断される。

中世の陶磁器（第23図）

珠洲系陶器の壺T種・摺鉢、越前焼、青磁類が包含層中に認められた。珠洲系陶器を除けば僅少である。珠洲系陶器は壺T種の体部片が多いが、個体とすれば3個体前後と観える。焼成良好ながらじて軟質な感じを受ける。タタキの仕様は右下がりで条間のやや広い平行タタキが充填され内面には小判形のアテ痕を認める。摺鉢は静止糸切りの底部資料（第23図）他8点があり、およそ珠洲系陶器編年の中期に對比できる例が大半と判断され

る。越前系陶器も同等の時期と推察され、壺肩部に格子目の加飾が施されるものがある。

2 土製品（土錐）

細片をも含めると10点の土製品が主として包含層中から出土しており、この内8点は有孔紡錘形の土錐と考えられるものである（第24図16～21）。長さ39～64mm・最大径10～23mm・孔径4～10mmの法量的ばらつきが認められる。成形は手捏ねで特段の調整は施されない。

3 石製品（砥石）

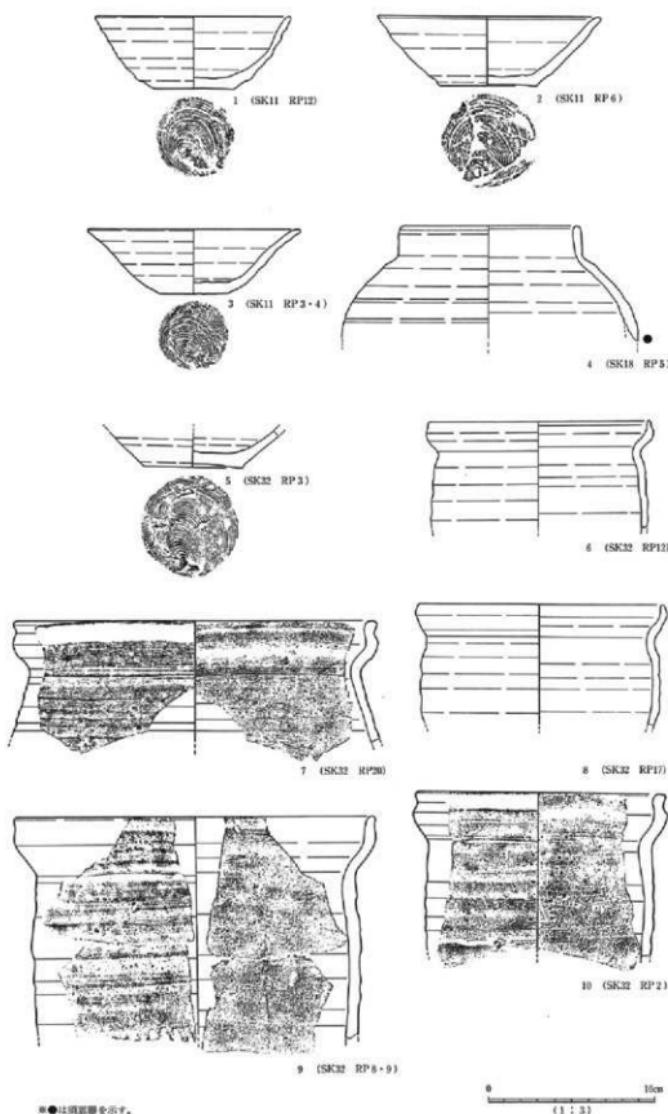
7点の砥石が包含層およびS J 1等から出土しており、内5点について図示している。石材は目の粗い火山岩系（第24図21・23）と粒子の緻密な粘板岩系（第24図22・24・25）とがあり、使用頻度等を捨象すれば断面方形と長方形の別が認められる。概して表裏両面中央部あるいは両側面のすり減った例が多く認められ、基本的に四面共に使用されるものが大半と観察される。なお、一例ながら頭部を山形に整形する偏平で有孔のものが（第24図22）があり、携帯用かと考えさせる。あるいは中世の温石等から転用された例とも思われたが定かでない。これらの所属時期は確証はないものの、最後に述べた温石的なものを除けばいずれも古代のものと位置づけて大過ないと考えられる。

4 金属製品

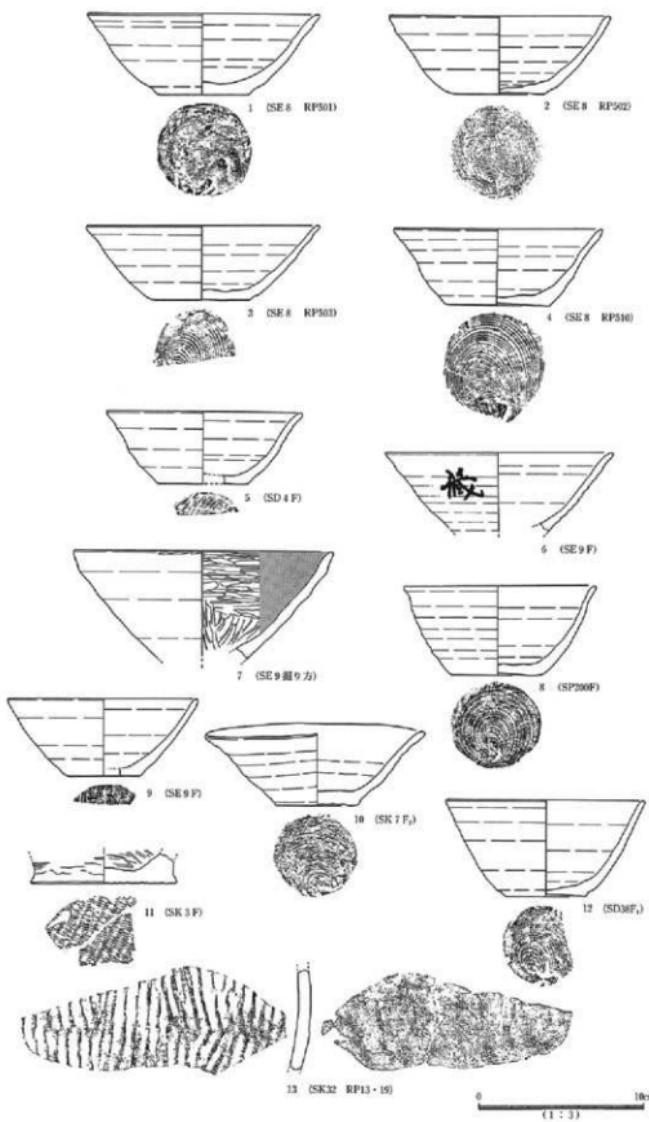
近世以降と判断できる金属製品の残片や古銭類20数点が出土している。この中で、明らかに古代に帰属すると判別できるものとして金銅製で黒漆塗りの帶金具（丸柄）1点（第24図26）があり注目される。以下に概要を述べる。出土地点はS B12建物跡を構成する柱穴E B56の覆土2層上面である。しかし、E B56には建て替えによる重複が認められ、位置から見て柱根を残す掘り直された新たな柱穴の覆土中と判断された。なお、対となる柱穴はE B49と看取られる。同時に検出された土器はあかやきの小形甕細片1点であり、時期的特徴等の窺えない資料であった。形状は下膨れ様の蒲鉾形で、横長の透かし（4×22mm）をもつ。法量は長径34mm・短径22mm・高さ5mm・厚さ1mm弱を各測る。漆は極薄く外面にのみ塗布されており、内面は鋳造時のままと観察される。また、ベルトへ取付けるための爪3本（径1mm）が円弧中央の内側および底辺の両側縁に各配置されており、射し込み式の形態であったことが窺えた。

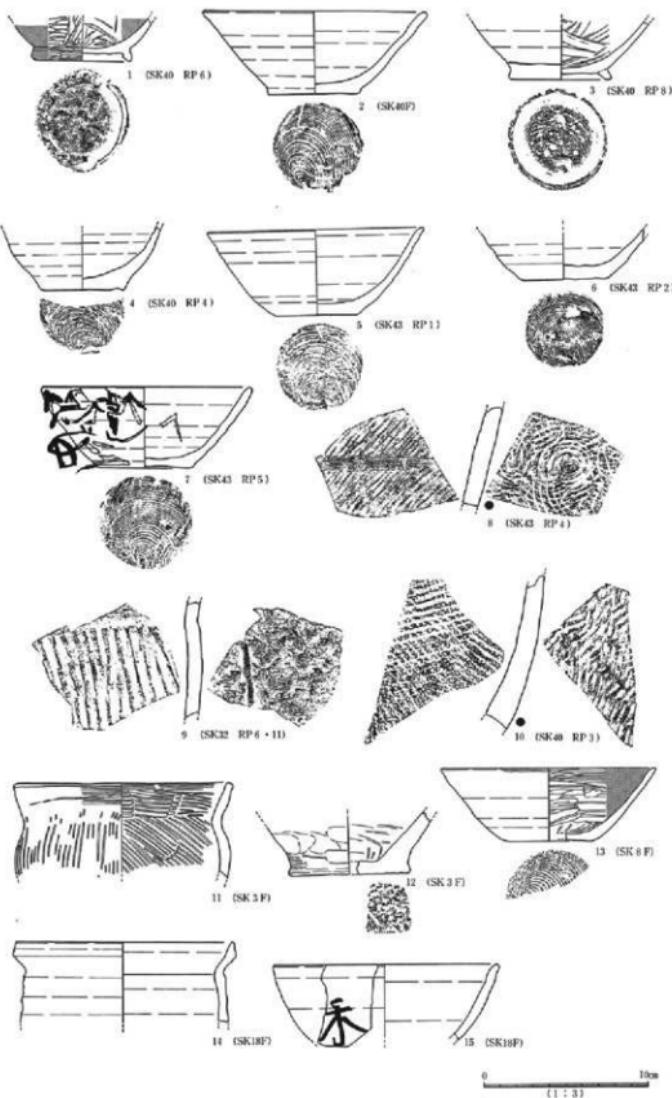
5 木製品（第25図）

柱根や井戸枠部材を除く木製品は箸・曲物・箆・簀串等があり、全体で54点の出土数が数えられ、器種的に箸・簀串の類が量的まとまりを見せていた。これらは構造内から出土したもののが大半で、S E 8での簀串6点以上、および箸・棒状具の類、S K32での箆・箸・曲物、S K43での簀串2点他、S K 3の箸・曲物、S K41での曲物1例等が主要な内容となるものである。ここでは全体について解説する余裕がないため、個別の法量その他を観察表に譲ることとして、S E 8井戸跡に見る簀串について略記しておく。簀串6例の中で全形を止める第25図1・2・5を見れば、頭部を主頭、下端を劍先状とする特徴的形態が認められ、頭部の片側に切り込みを入れる仕様が共通に窺えた。切り込みは木目と平行ではなくやや斜め方向である。なお、山形から続く平行な側面上部での毛羽状切り込みは他の資料も含めて認めなかった。材質は箸類も含めていずれも杉と同定される。

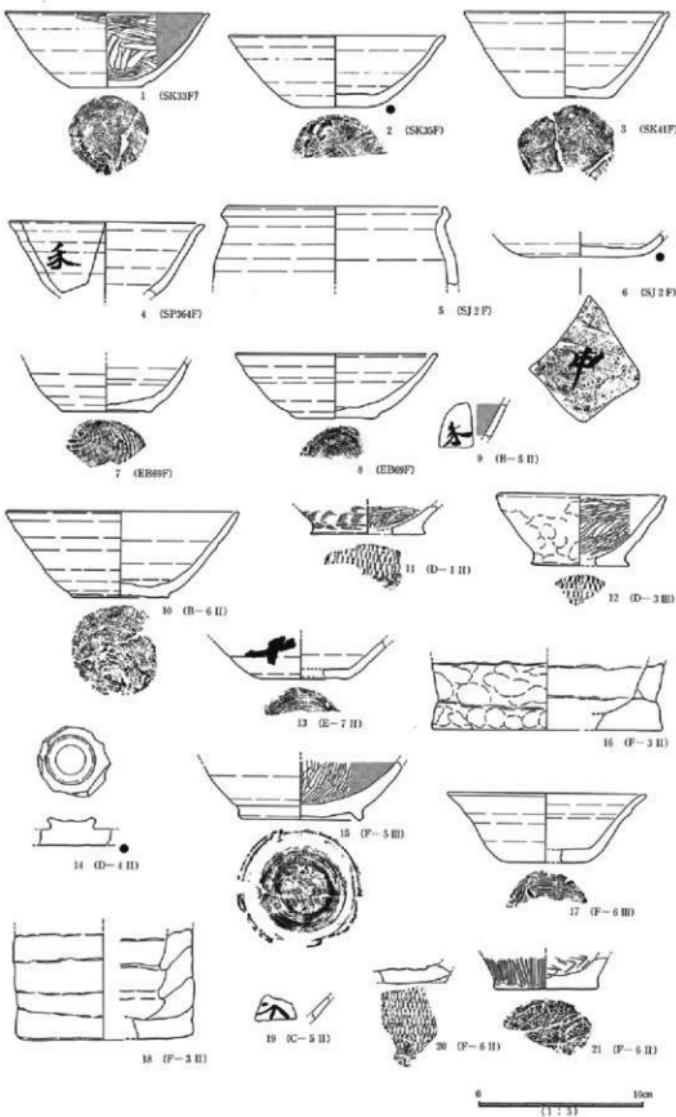


第18図 建物実測図(1)

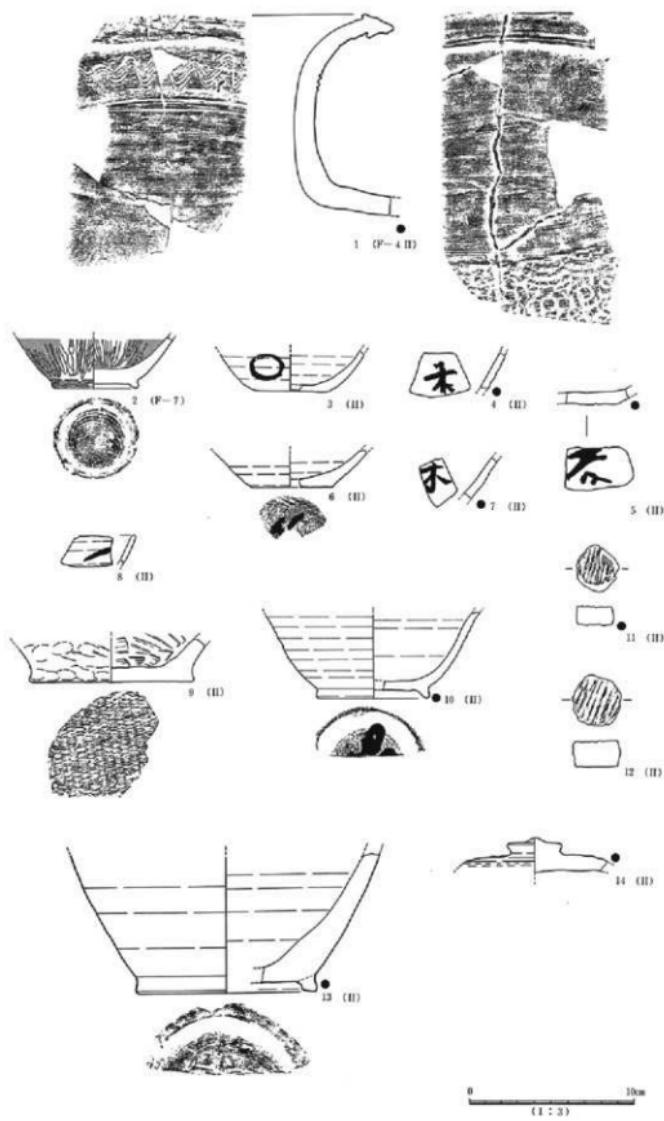




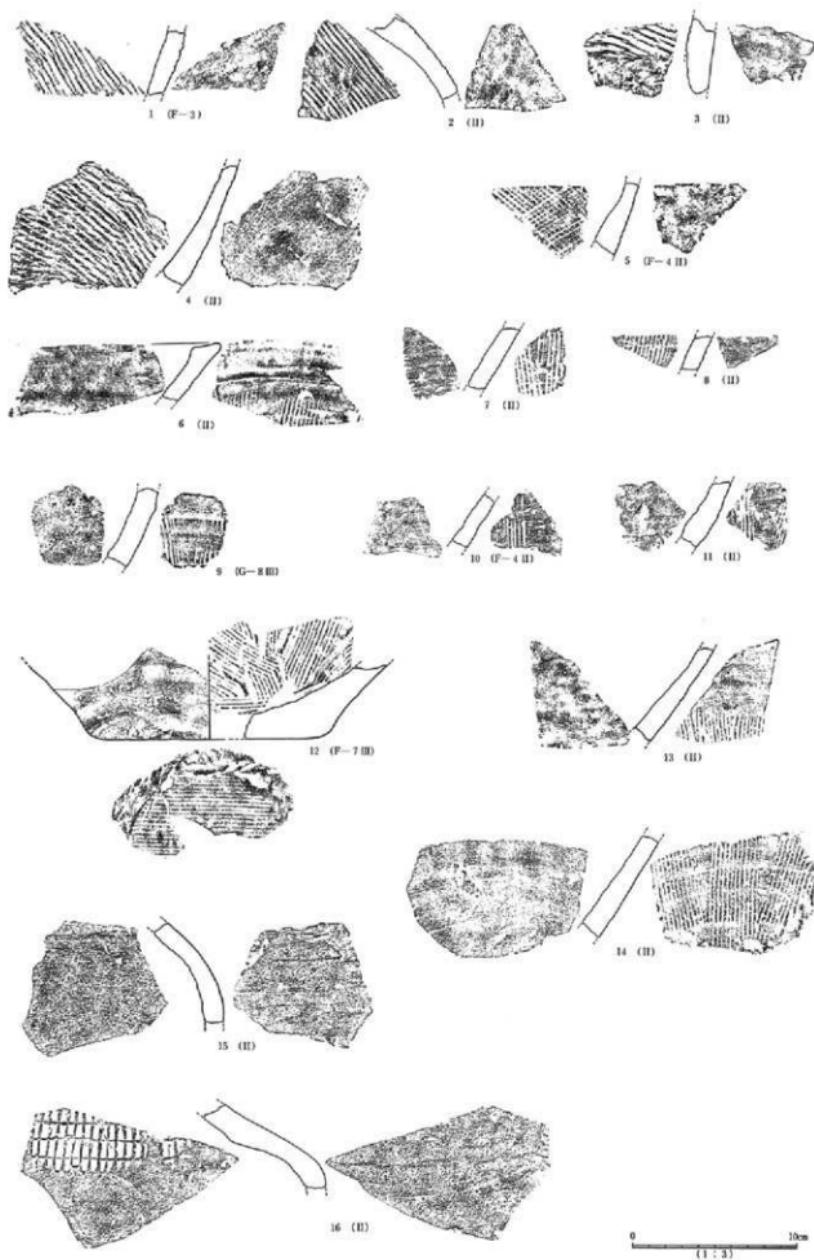
第20図 遺物実測図(3)



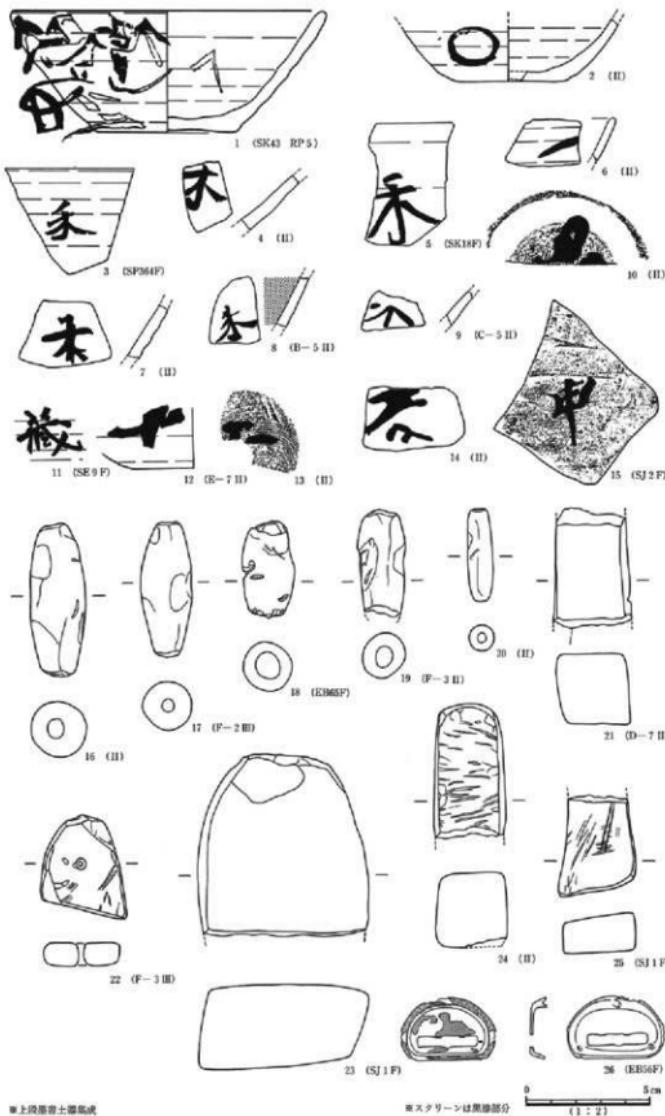
第21図 遺物実測図(4)



第22図 遺物実測図(5)



第23図 遺物実測図(6)

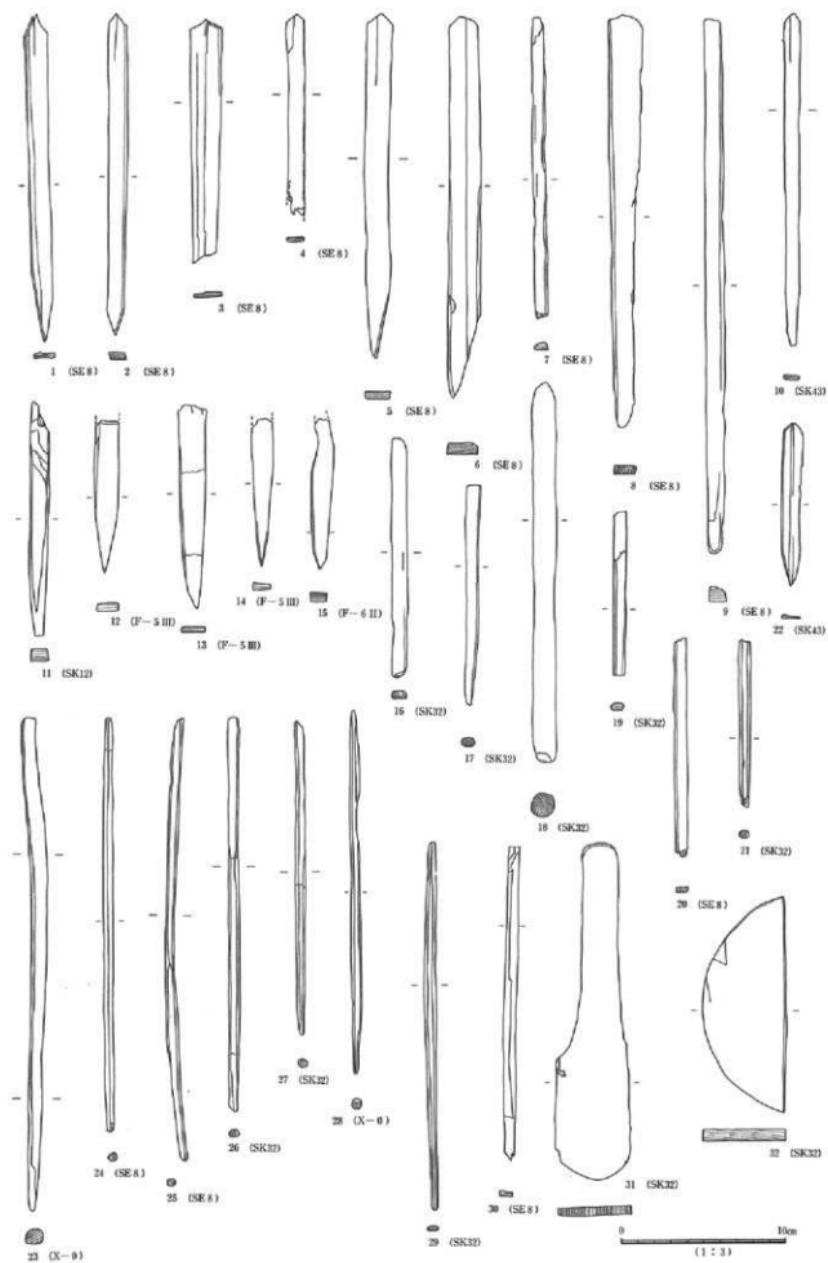


■上段基層土層底成

■ストリーンは黒跡部分

第24図 遺物実測図(7)

V 出土遺物



第25図 遺物実測図(8)

表1 木原遺跡遺物観察表(1)

器種	種別・器種	計測値(mm)				底部切削	調整・技法		出土地点	備考	
		口径	底径	高さ	壁厚		内面	外面			
第18回	環 壺	120	50	45	3.5	回転糸切	クロ	クロ	SK11(RP12)		
		136	60	43	6	〃	〃	〃	〃 (RP6)		
		130	45	37	5	〃	〃	〃	〃 (RP2-0)		
		110			6.5	〃	〃	〃	SK18(RP5)		
		62		5	回転糸切	〃	〃	〃	SK32(RP3)		
	壺	136		5		〃	〃	〃	〃 (RP12)		
		221		6		〃	〃	〃	〃 (RP20)		
		149		5		〃	〃	〃	〃 (RP17)		
		270		6		〃	〃	〃	〃 (RP8)		
		151		5		〃	〃	〃	〃 (RP2)		
第19回	环 壺	142	58	50	7	回転糸切	〃	〃	SE8(RP60)		
		135	56	48	5	〃	〃	〃	〃 (RP502)		
		142	60	46	6.5	〃	〃	〃	〃 (RP503)		
		126	64	47	5	〃	〃	〃	〃 (RP510)		
		116	48	48	6	〃	〃	〃	SD4 F		
	壺	141			4.5	〃	〃	〃	SE9 挿方 黒帯「歲」		
		160			5.5	ミガキ	〃	〃	〃 内黒		
		117	60	59	4.5	回転糸切	クロ	〃	SK200(RP1)		
		120	56	45	5	〃	〃	〃	SE9 F		
		134	51	50	5.5	〃	〃	〃	SK7 F 2		
第20回	土 壁 壺	99				ヘラナデ	ナデ	SK3 F	嗣代底		
		122	50	59	5.5	回転糸切	クロ	ロクロ	SD3F		
		8				〃	〃	〃	SK32(RP9)		
		1 黒色土壺	高台付	31	4	回転糸切	ミガキ	ミガキ	SK40(RP6)	両馬	
		2 あかやき土壺	环	136	56	51	6	〃	ロクロ	SK40F	
	土 壁 壺	3 土 壁 壺	高台付	64	3.5	〃	ヘラミガキ	〃	SK40(RP8)	非内黒	
		5 あかやき土壺	环	51.5	6	〃	ロクロ	〃	SK42(RP4)		
		5	133	52	53	5	〃	〃	〃 (RP1)		
		6	50	5	〃	〃	〃	〃	〃 (RP2)		
		7	128	58	59	5.5	〃	〃	〃	墨縄人面?	
第21回	須 壺	11				円心凹アテ	平行タチキ		〃 (RP4)		
		9				アヌリケシ	〃	SK32(RP6)			
		10			12.5	平行アテ	〃	SK40(RP3)			
		11			5.5	刷毛目	刷毛目	SK3 F			
		12	74	8		ヘラナデ	ナデ	〃			
	壺	132	54	45	4.5	回転糸切	ミガキ	ロクロ	SK8 F	内黒	
		132		5		〃	〃	〃	SK18F		
		140		6.5		〃	〃	〃	墨縄「禾」		
		1 黒色土壺	环	124	45	47	4.5	回転糸切	ミガキ	SK35F	内黒
		2 須 壺	131	55	44	4	〃	ロクロ	〃	〃	
第22回	土 壁 壺	126	54	53	5	〃	〃	〃	SK41F		
		119			5	〃	〃	〃	SP364F	墨縄「禾」	
		138			6.5	〃	〃	〃	SJ2 F		
		86			4.5	ヘラ切り	〃	〃	〃	墨縄「印」	
		54			7	回転糸切	〃	〃	E89F		
	須 壺	124	52	40	5	〃	〃	〃	〃		
		76			4	ミガキ	〃	〃	B-5 II	墨縄「禾」	
		143	59	54	4	ロクロ	〃	〃	B-6 II		
		70			5	ミガキ	ナデ	〃	D-1 II	嗣代底	
		102	59	43.5	5.5	〃	〃	〃	D-3 III	4	
第23回	須 壺	52		5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	〃	E-7 II	墨縄「十」	
		52				ヘラ切り	〃	〃	D-4 III	内盤状	
		76			9.5	回転糸切	ミガキ	〃	F-5 III	内黒	
		140.2			13.5	〃	ナデ	ユビオサエ	F-3 II		
		122	50	43	5	ロクロ	ロクロ	〃	F-6 II		
	環 壺	110			16	ナデ	ユビオサエ	〃	F-3 II		
					5	ロクロ	ロクロ	〃	C-5 II	墨縄「禾」	
						〃	〃	〃	F-6 III	嗣代底	
						ナデ	ハゲメ	〃	〃		
		65				〃	〃	〃	〃		
第24回	須 壺	12				タタキ	青海波	〃	波状沈綴		
		52				回転糸切	ミガキ	〃	F-7	内黒	
		48		4	〃	ロクロ	ロクロ	〃	F-7 II	墨縄「○」	
				3	〃	〃	〃	〃	墨縄「禾」		
	環 壺	56			5.5	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	〃	墨縄「不明」	
						回転糸切	ロクロ	ロクロ	〃	墨縄「禾」	
						〃	ロクロ	ロクロ	〃	墨縄「不明」	
						〃	ロクロ	ロクロ	〃	墨縄「禾」	

表2 木原遺跡遺物觀察表(2)

測定 番号	種別・器種	計測箇所 (mm)			底部切端	調整・技法		出土地点	備考
		口径	縦幅	側高		内面	外圍		
9	土 壁 器 類	100			ヘラナデ	ナデ	F-7 II	編代底	
10	土 壁 器 類	67	4.5		回転糸切	ロクロ	〃	恐者 不明	
11	須 恵 器 類	円筒						打穴	
12	珠 球 帯							〃	
13	須 志 帯	110	11		回転糸切	ロクロ	ロクロ	〃	
14	須 志 帯						回転ケズリ	〃	
1	東 京 系				12	横円形アテ	条縫タタキ	F-3 II	
2					13	〃	〃	〃	
3					17	〃	〃	〃	
4					12	〃	〃	〃	
5					14	〃	〃	F-4 II	
6	東 京 系				9	細目	ロクロナデ	〃	
7					11	〃	〃	〃	
8					16	〃	〃	〃	
9					13	〃	〃	G-8 III	
10					9	〃	〃	F-4 II	
11					11	〃	〃	〃	
12					148	静止糸切	〃	F-7 III	
13					12	〃	〃	F-7 II	
14					13	〃	〃	〃	
15					12	ヘラナデ	ナデ	〃	
16					13	〃	格子状タタキ	〃	
		(底)	(幅)	(厚)					
16	土 製 品	63	22	9			オサエ・ナデ	F-7 II	
17		56	20	8			〃	F-2 II	
18		40	22	5			〃	EB65	
19		44	19	6			〃	F-3 II	
20		38	11	4			〃	E-2 II	
21	石 製 品	50	32	29			D-7		
22		43	34	9			F-3 III		
23		75	70	29			SX 1 F		
24		55	30	31					
25		42	31	15			SX 1 F		
26	金 属 製 品	帶金具					EB56F	黒漆塗	
1	薺 串	290	12.5	3			SE 3 F		
2		198	11	4			〃		
3		150	18	2.5			〃		
4		124	10	3			〃		
5		213	15	4.5			SE8 (RW504)		
6	棒状製品	235	19	7			SE 8 F		
7		187	8	4.5			〃		
8		254	14	5			〃		
9		330	11	9			〃		
10		205	9.5	3			SK43F		
11	薺 串	144	11	8			SK12F		
12		95	14	5			F-5 III		
13		126	15	3			〃		
14		91	11	4			〃		
15		94	10	6			F-6 II		
16	棒状製品	148	4.5	4.5			SK32F		
17		135	9	5			〃		
18		234	14	14			〃		
19		101	7	5			〃		
20		135	7.5	3.5			SE 8 F		
21	薺 串	103	6.5	4.5			SK32F 3		
22		109	11	2			SK43F		
23		340	11	9			X-0		
24		254	5	6			SE 8 F		
25		271	5.5	4.5			〃		
26	棒状製品	243	6	5			SK32F		
27		193	6	6			〃		
28		224	5.5	6			X-0		
29		226	7	3			SK32F 3		
30		194	8	3			SE 8 F		
31	曲物底	207	44	5			SK32 (RW1)		
32		133	52	7			SK32F		

VI まとめ

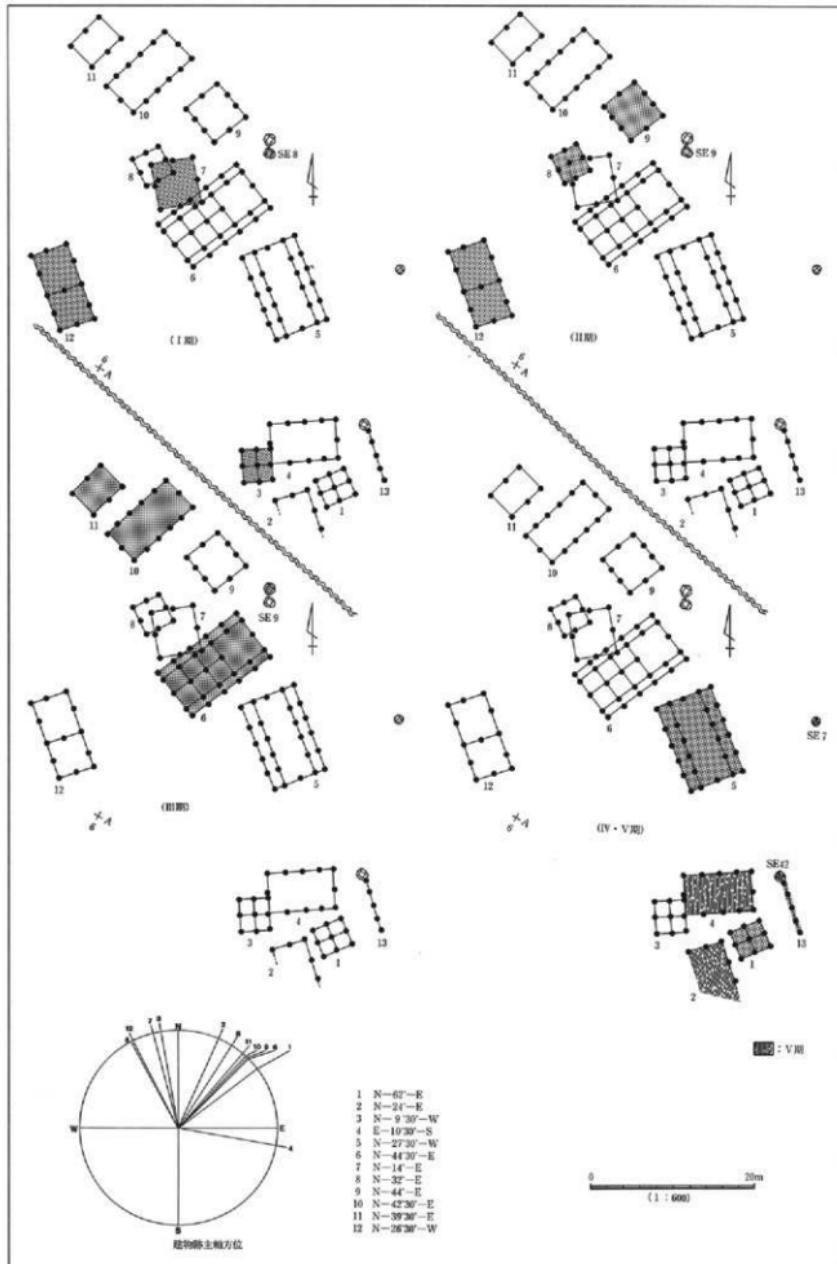
本遺跡の調査ではこれまで記した遺構・遺物の内容が検出された。年代的主体は10世紀前半(915年)に噴出したと考えられる火山灰(十和田a)降灰前後の時期に直接的関わりをもっていることが理解され、幾つかの遺構を埋積する覆土中等にその片鱗が窺い知れたことは既に記した通りである。以下に遺構の変遷と性格を中心に整理してまとめとしたい。

建物跡は住居や倉庫、あるいは付属屋と考えられる12棟が認められ、加えて柱列から推定できる板垣等の施設も認められた。しかし、これらは掘り方の仕様や規模、あるいは出土遺物・埋め土内への火山灰混入等で異なっており、S B(4)・5・6・10・(11)等は火山灰降下後、その他の建物跡は降下前の所産と識別されるのである。従って、柱材の選択や加工仕様における変化、あるいは廻付・床敷建物形態の採用と普及といった建築様式面での変革や画期もこの頃の年代に求め得る可能性が指摘できるのではないかと推察された。時期は火山灰の同定に誤りがなければ10世紀の第1四半期と言うことが可能であろう。

一方、井戸跡は井戸枠の明瞭なS E 9他4基の存在が推測された。これらはS B12・7～9、S B6・10・11の建物群に伴うS E 8・9、同S B1～5に伴うS E(K)7・42等の配置と変遷と理解でき、大きくは建物3棟程度で構成される居住単位群2単位の変遷に関わった遺構と推測される。但し、南東群の建物は未検出の幾つかが調査区外南方に広がる状況が推測され、的確にその変遷を捉えきれない感覚が残る。また、烟跡と考えられる浅溝状の痕跡も同様に見ることができる性格のものと判断された。従って、母屋・付属屋・井戸・土壤・烟跡等の遺構が一単位を成して遺跡を形成していると捉えられる。しかし、その經營体をどのように理解するか・できるかによっては遺跡・遺構の性格が微妙に変わり、単に一般農村集落跡と規定してよいかどうかは思案される所である。

以上の事柄と建物方位等を勘案すれば第26図に示す建物群の構成と変遷が考定されたが、IV・V期と認識した内容については建物構成等に不確かな点のあることを断つておく。各期の年代はI期：9世紀後葉、II期：9世紀末～10世紀初頭、III・IV期：10世紀前葉、V期：10世紀中葉と各々捉えられ、火山灰を鍵層として考えられる遺物群の年代的構成にも対応するあり方であることが理解された。すなわち、S E 8(I期)→S E 9・SK40(II期)→SK43(III期)→SK11(IV期)→SK32(V期)等の変遷である。SK3は不明確ながらI・II期頃の所産と推測されよう。なお、パリノ・サーヴェイに依頼して行った理科学分析の結果を列記しておく。SK40土壤のテフラ(火山灰)はT o-a(十和田a)に同定される。樹種ではS B12を構成する柱根E B47・52・53・60がクリ、S B5に関わるE B64はモクセイ科のトネリコ属の一種、S B8のE B272はクリ、SK32の柵・箸はスギとする鑑定結果が得られた。また、S B12・EB52の柱根を対象として実施した放射性炭素年代測定の結果は860年±120y(AD 1090)で11世紀末葉代となる。土器他から推察される年代、9世紀後半ないし末葉の年代観からすれば格差は大きいと思われ、少なくとも火山灰降下以前に位置づけられるべきものであることは間違いない。

VI まとめ



報告書抄録

ふりがな	木はらいせきだい 2 じ ほくつちょうさ ほうこくしょ
書名	木原遺跡第2次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301
発行年月日	西暦1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木原	山形県飽海郡遊佐町大字宮田字木原・字高田	6461	平成2年度登録	39度15分40秒	139度53分56秒	19930511～19930730	6,000	県営ほ場整備事業(月光川下流地区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木原	集落跡	平安時代 前期～後期 中世	掘立柱建物跡 井戸跡 土壙 溝跡 畝状溝跡	あかやき土器 須恵器 内黒土器 木製品 中世陶器 帶金具	自然堤防上に12棟の掘立柱建物跡他が検出され、9世紀中葉から10世紀中葉頃にかけての間I～V期にわたる遺構群の変遷が辿れる。

図 版



調査区遠景(西南から)



調査区近景(西から)



調査風景(東から)

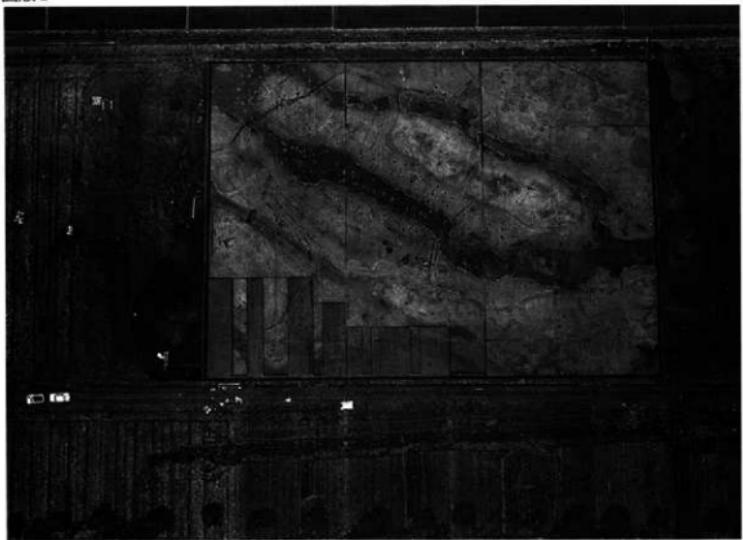


調査風景



調査風景

図版 2



空中写真(上空から)



空中写真(東上空から)

図版 3



空中写真(調査区東半)



空中写真(調査区中央)

図版 4



調査区全景(東から)



調査区北半部(東南から)



SD38・SK32・41・42他(北東から)



調査区中央部の建物跡群(南東から)



SB 6・7・8近景(西北から)



SB40・SB 1・2(東北から)



SB 6 建物跡近景(北から)



SB 8 建物跡(西から)



SB 7・8 建物跡近景(北西から)



SB 6 建物跡・後方SJ 2(北から)

図版 6



SE 9 完成状況(西から)



SE 9 接出状況(南東から)



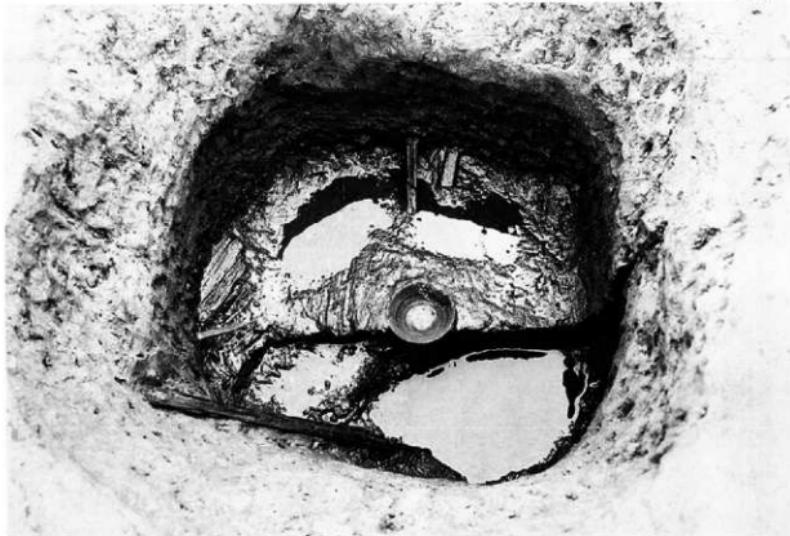
SE 9 土層断面(西南から)



SE 9 土層断面(南から)



SE 9 完成状況(東から)



SE 8 掘出状況(西から)



SE 8 遺物出土状況(南から)



SE 8 遺物出土状況(底面)



SE 8 遺物出土状況(南から)



SK4I 出土曲物(東から)

図版 8



SK32土層断面(西南から)



SK32遺物出土状況(曲物)



SK43検出状況(南西から)



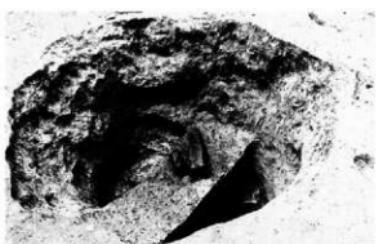
SK22検出状況(東から)



SK43土層断面(南東から)



SK26土層断面(西から)



SK 7 検出状況(北西から)



SK 7 遺物検出状況(北から)



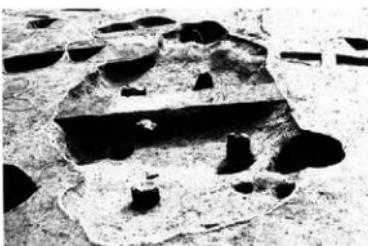
SK18検出状況(東から)



SK18土層断面(東から)



SK18遺物出土状況(西から)



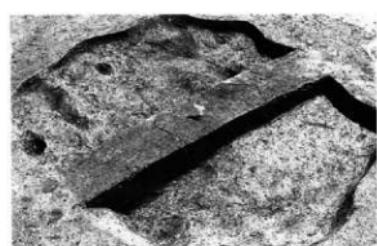
SK40検出状況(東から)



SK3 検出状況(南から)



SK34~36・SD38土層断面(北西から)



SK19検出状況(北西から)



SK23検出状況(東から)

図版10



SB12・EB52(南から)



SB12・EB52(西南から)



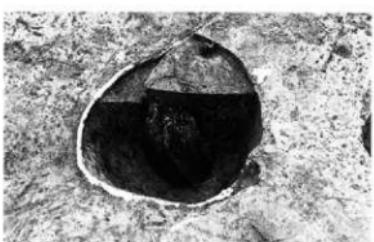
SB12・EB47(東から)



SB 8・EB270(北から)



SB12・EB50(西南から)



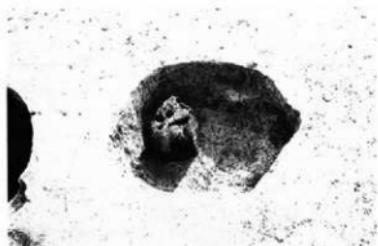
SB12・EB49(北東から)



SB12・EB59・60(北東から)



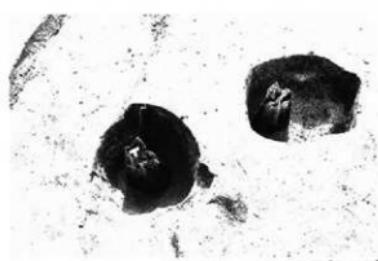
SB 8・EB270(東から)



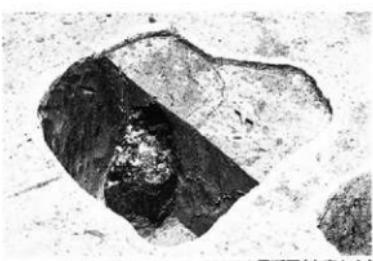
EB50検出状況(北から)



EB57検出状況(北から)



EB49・50検出状況(北から)



SP272土層断面(南東から)



SP265検出状況(東から)



EB383土層断面(南から)

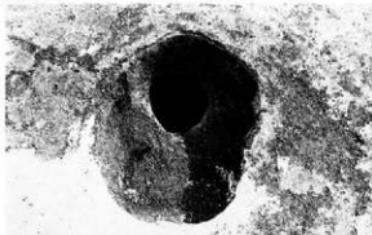


SP275検出状況(東から)



EB48土層断面(北から)

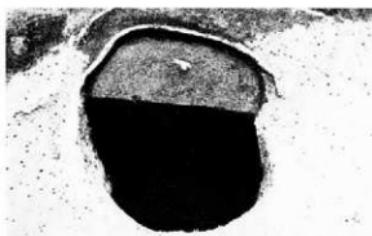
図版12



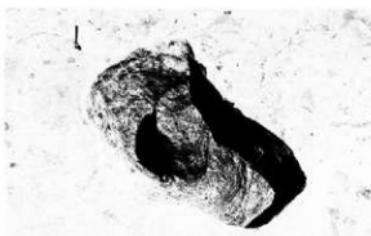
EB55検出状況(北西から)



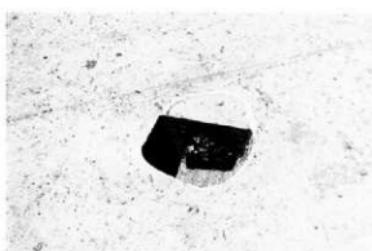
EB48柱穴(北から)



EB51土層断面(南から)



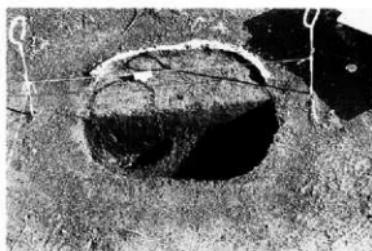
EB72検出状況(南から)



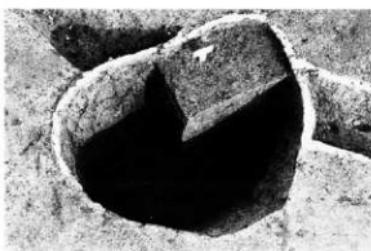
SP268土層断面(東から)



SP265土層断面(東南から)



SP262土層断面(南から)



SK485検出状況(西北から)



SD199他溝跡群(西から)

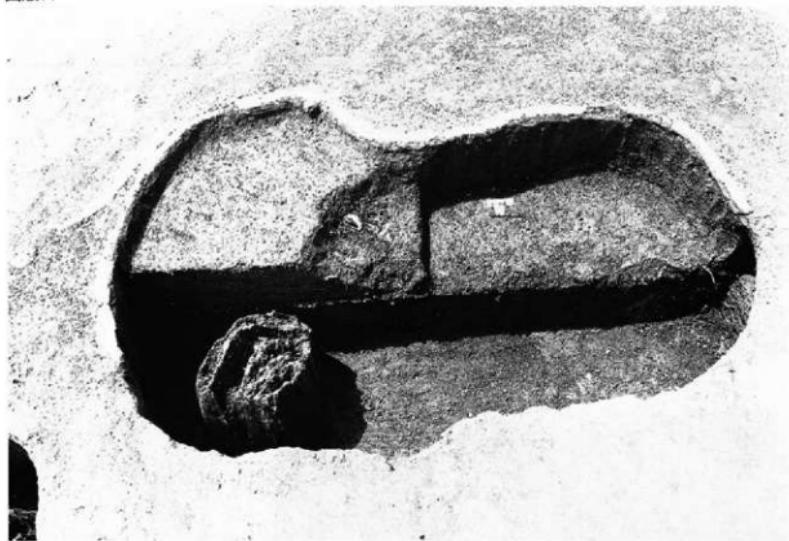


SG 6 土層断面(西から)



SD38溝跡(北東から)

図版14



丸瓶検出状況(北から)



遺物出土状況(あかやき土器環)



遺物出土状況(須恵器環)



遺物出土状況(須恵器器)



遺物出土状況(帶金具)



18-1



18-1



18-5



18-2



18-3



18-4



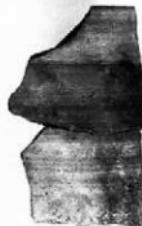
18-6



18-6



18-8



18-9



18-10



18-7



19-12



19-4



19-2



19-8

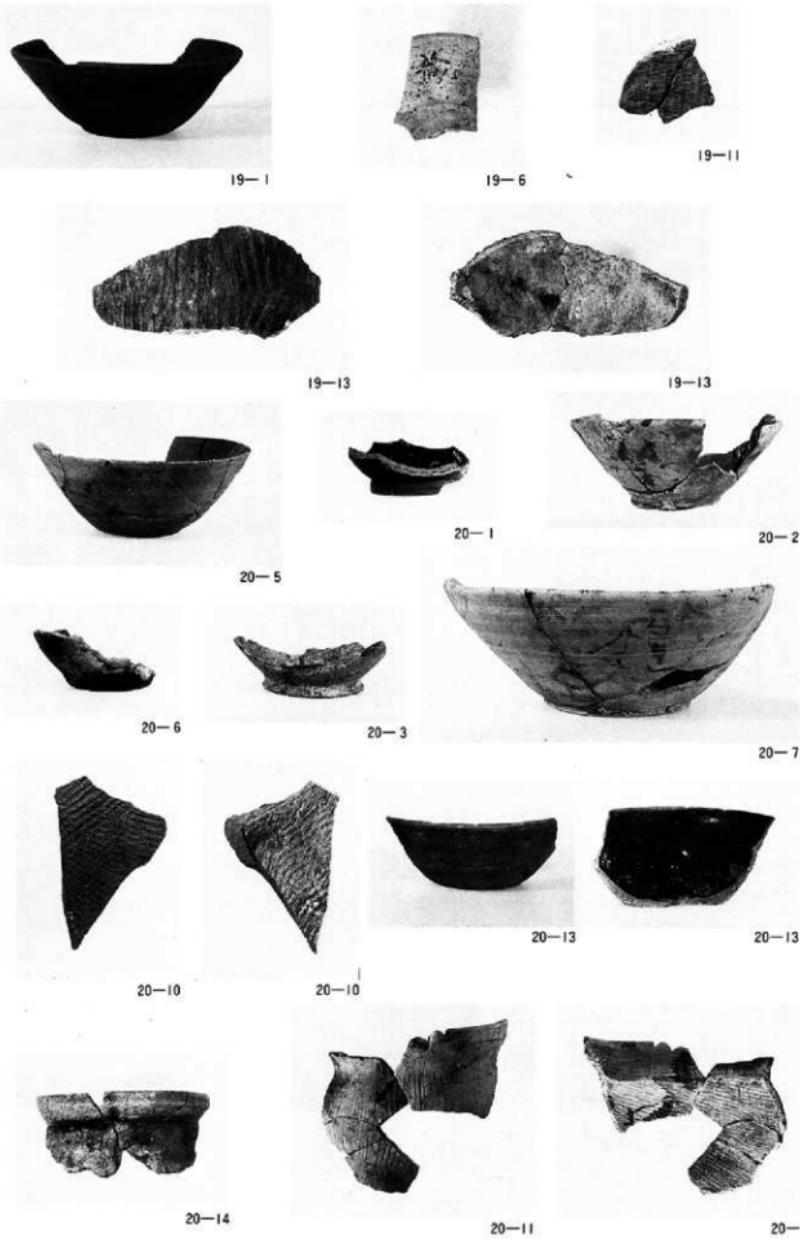


19-10



19-3

*18-1は挿図第18図の1番を表す。





20-8



20-8



20-9



20-9



21-1



21-1



21-2



21-3



21-7



21-10



21-15



21-14



5



24



21-5



21-18



21-18

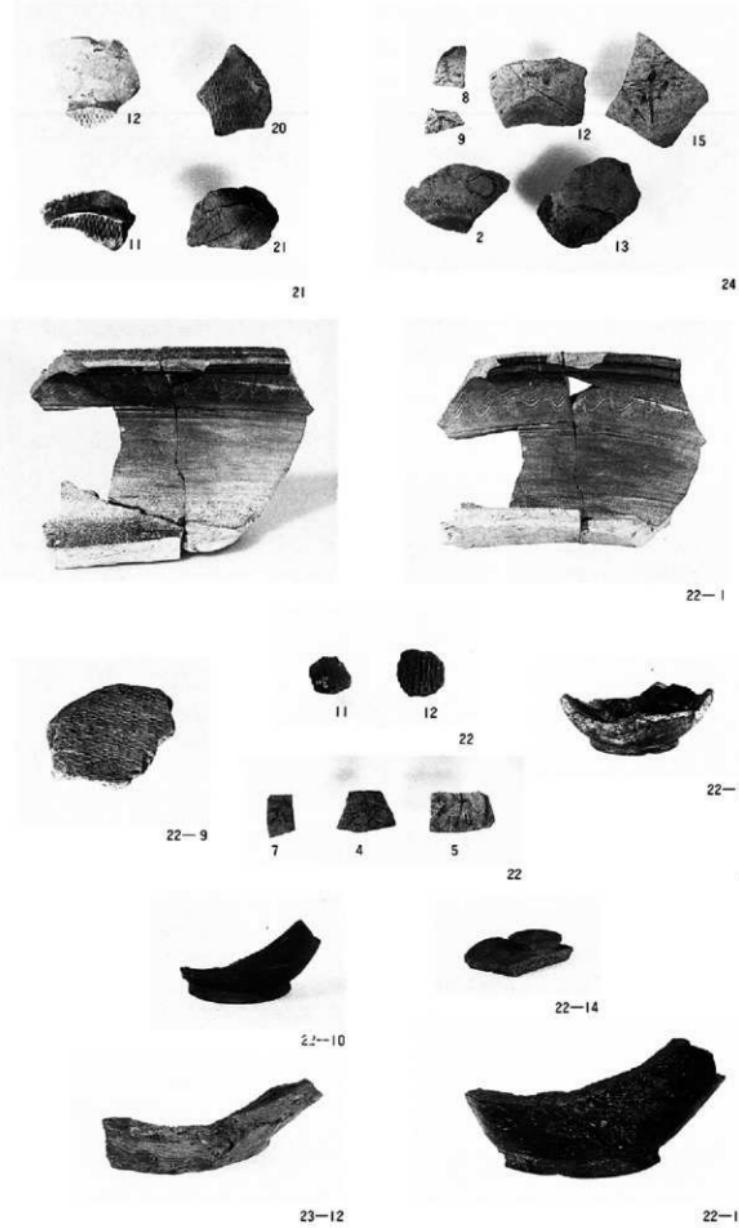


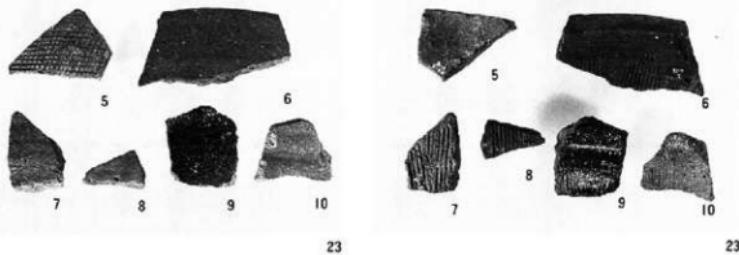
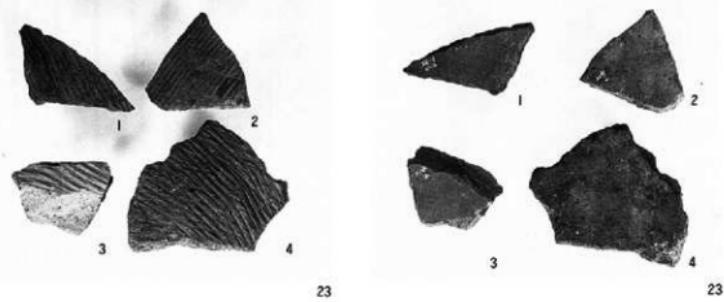
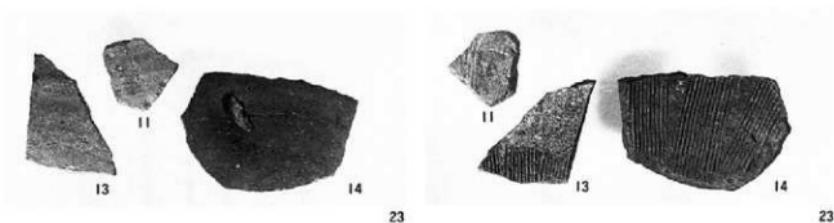
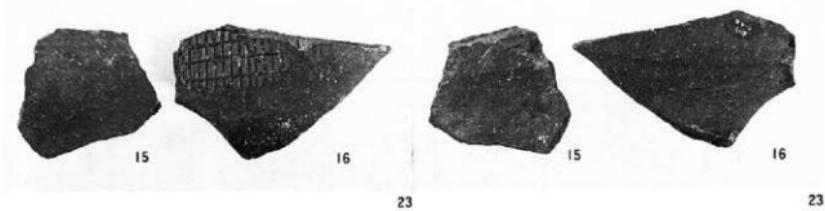
21-16



21-16

図版18







24



24

24-26

24-26



25

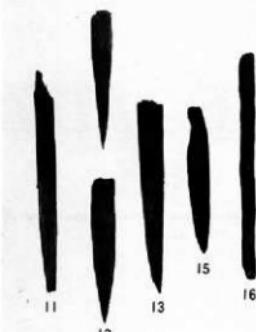
25



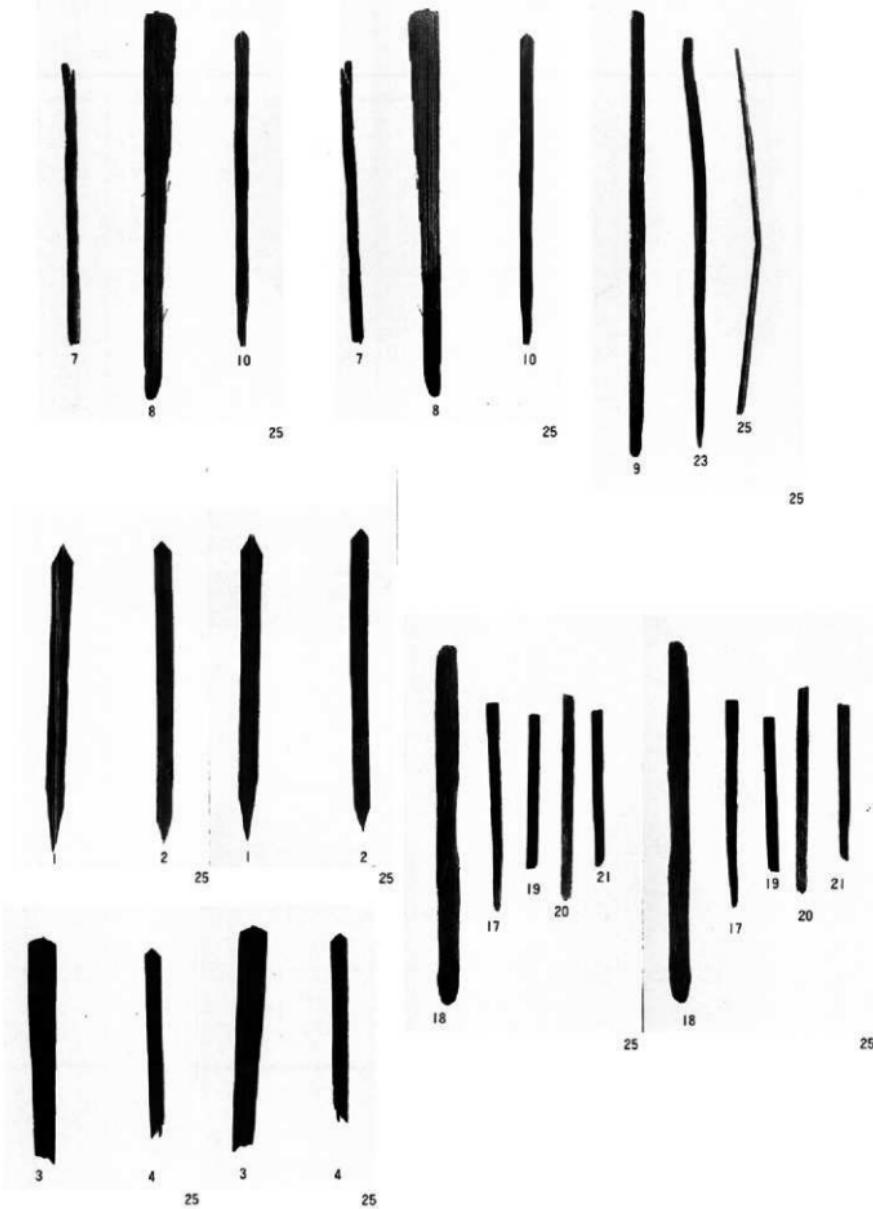
25



25



25



图版22

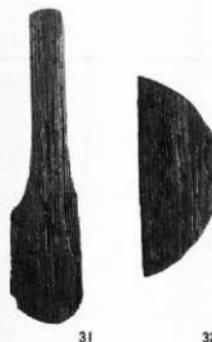


31



32

25



31



32

25



SK32出土曲物

同左



SB12 EB52

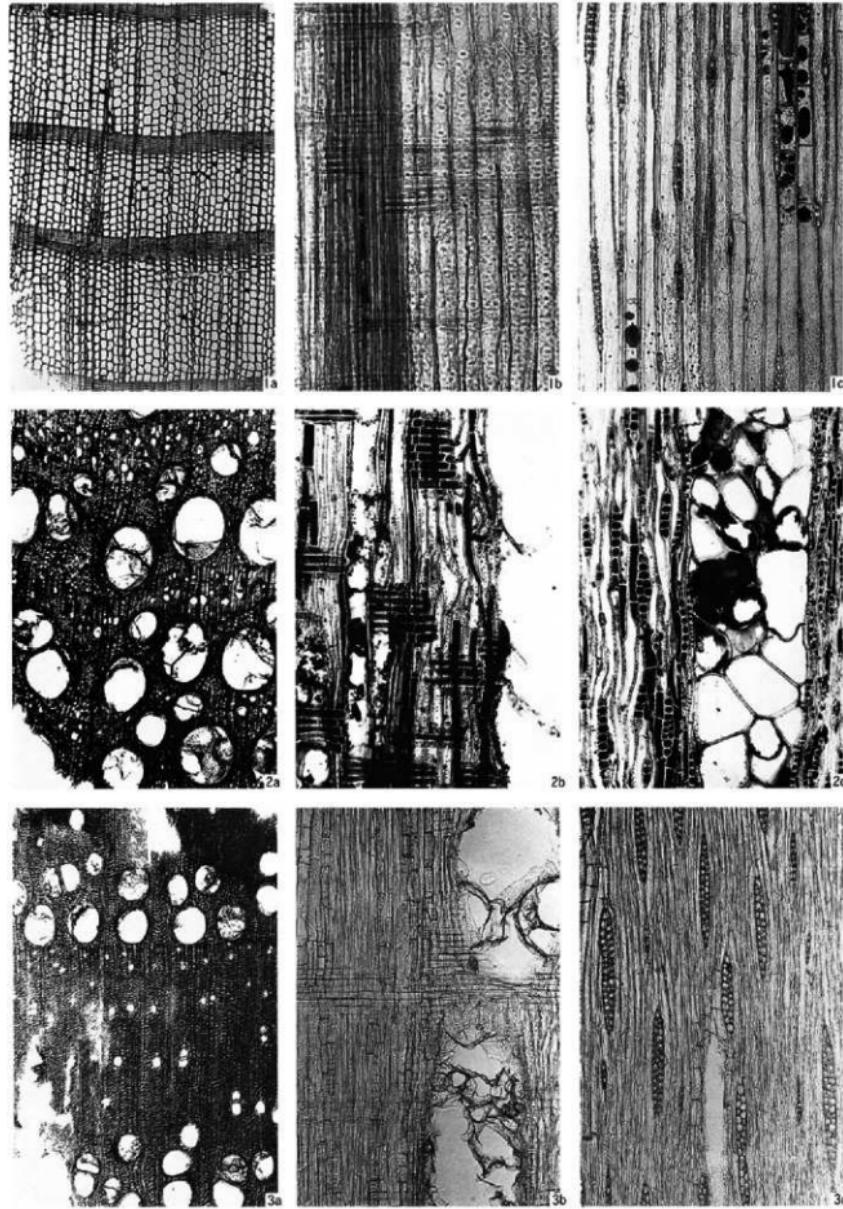


SB12 EB49

図版23



図版24



1. スギ (No. 1)
2. クリ (No. 4)

3. トネリコ属の一種 (No. 7)
a: 木口, b: 痕目, c: 板目

200μm : a
200μm : b,c
木材

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第8集

木原遺跡第2次発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 藤庄印刷株式会社
